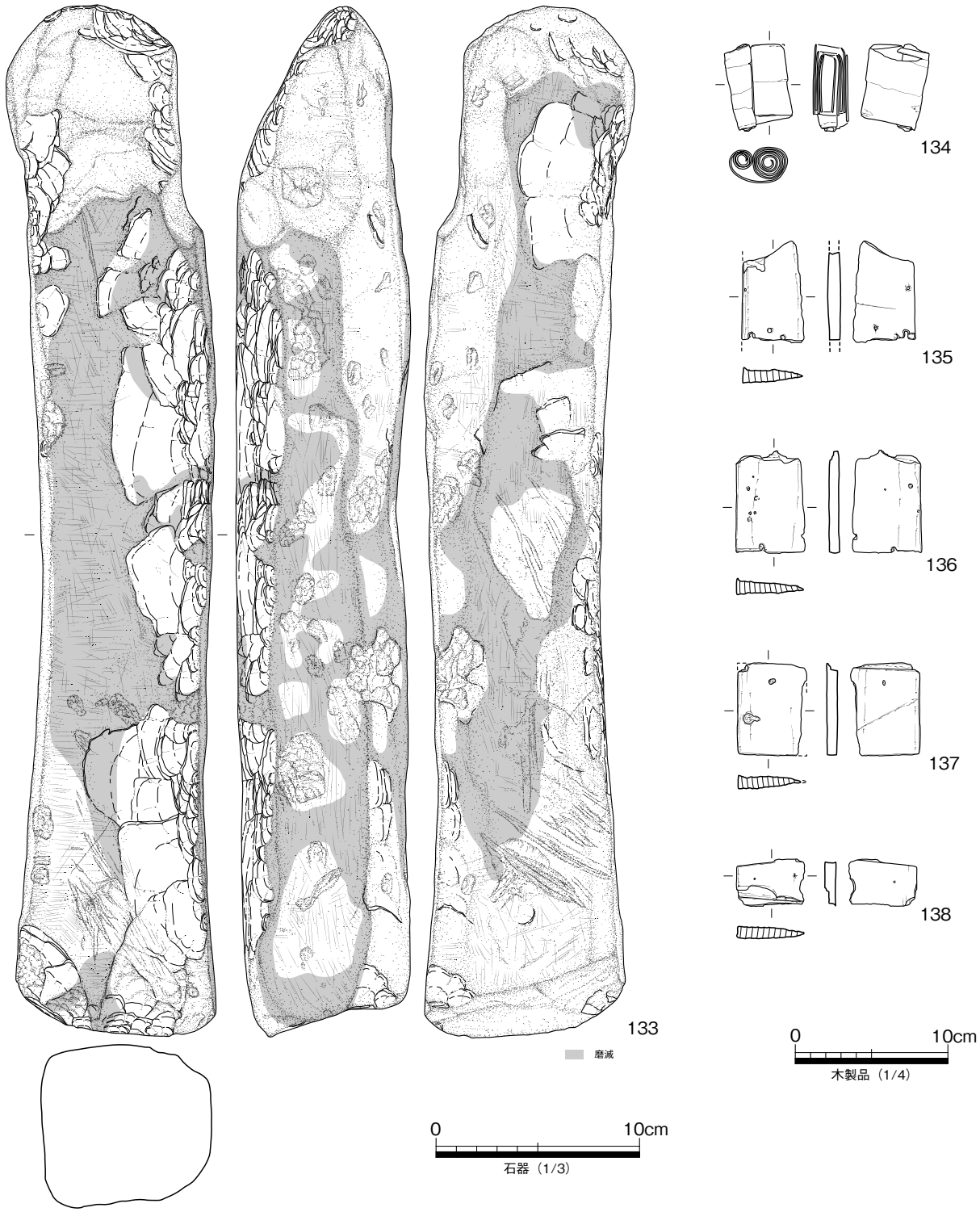
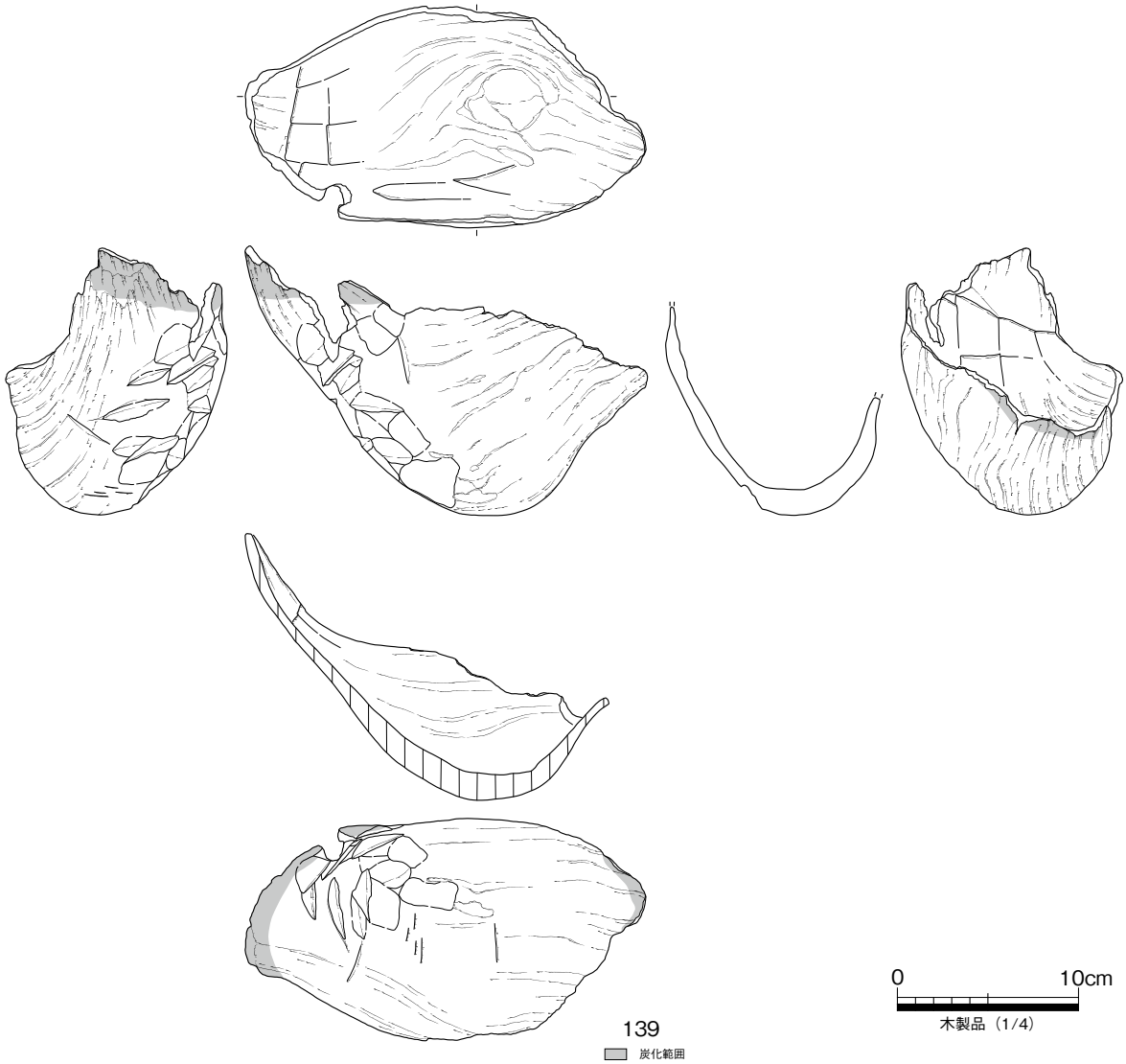


第 32 図　SR01 下層出土遺物実測図 18

川県教育委員会ほか 1990）や弥生時代前期中段階の大阪府東奈良遺跡ⅡＢ区溝 27（東奈良遺跡調査会 1981）、和歌山県西牟婁郡すさみ町立野遺跡遺構 302（公財和歌山県文化財センター 2013）などに出土例があり、同前期末頃には姿を消すとみられる（鳥取県埋蔵文化財センター 2005）。

中層（第 34 図）は、上述した下層上面に連続して堆積する灰色系粗砂～シルトを分層（同図 15 ～ 17 層）する。３層に細分され、全体的に上方へ細粒化して、流路西部をほぼ水平に堆積し、東端部は後述す

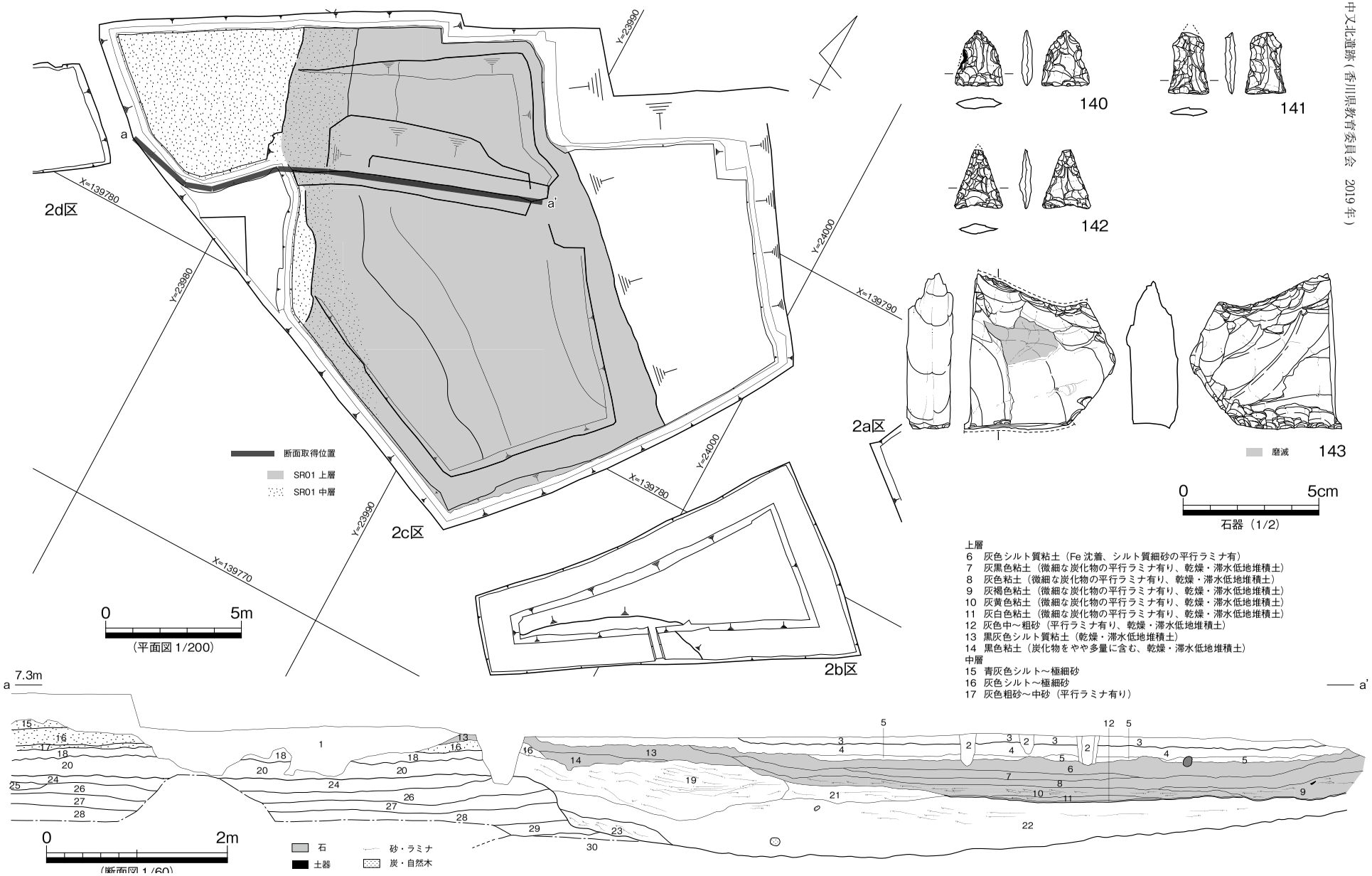


第 33 図　SR01 下層出土遺物実測図 19

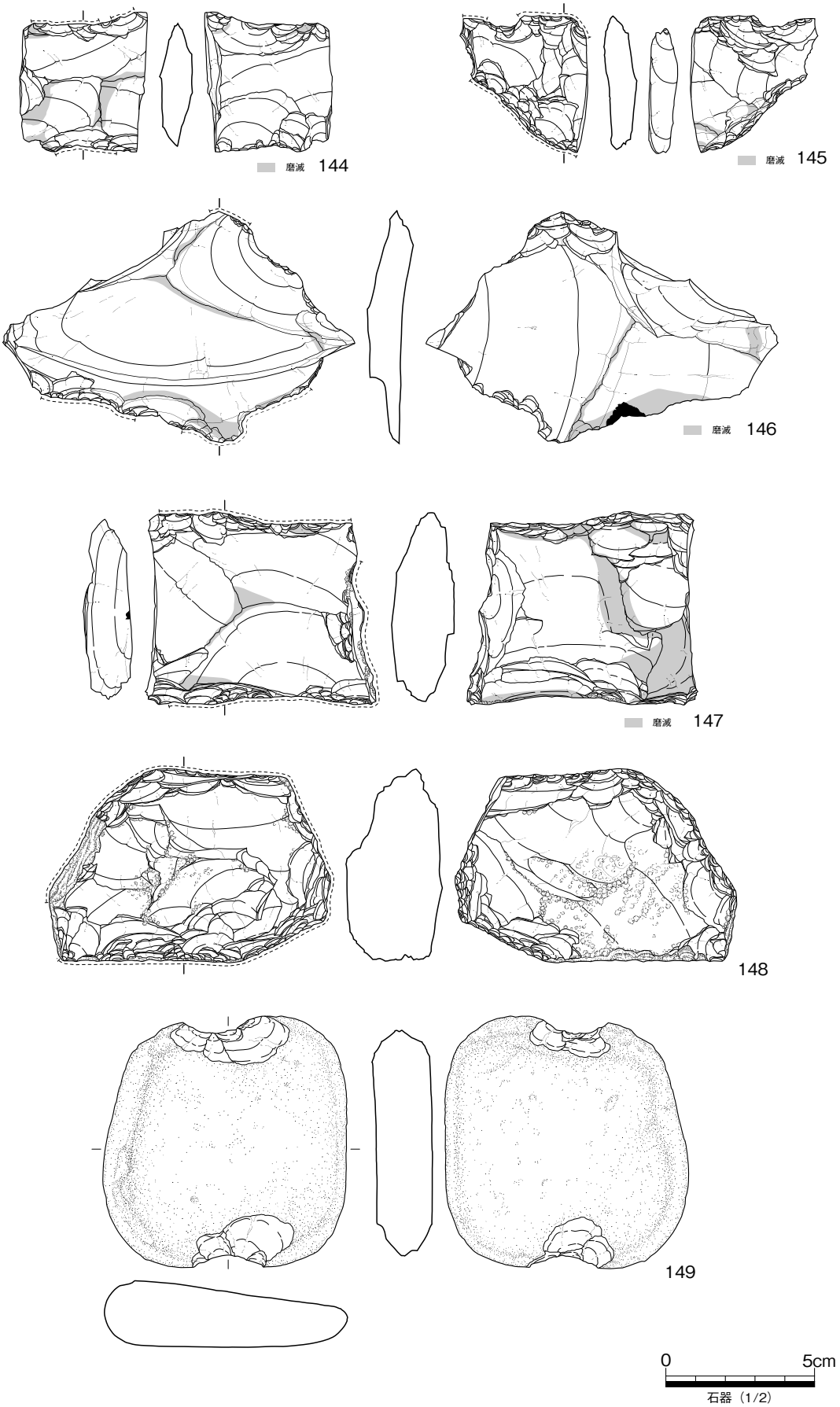
る上層に被覆される。層厚 0.34 mで、上面は旧耕作土や造成土に削奪されるものの標高 6.92 mを測る。後述する上層下面の最深部の標高は 6.0 m前後にあり、流路西側に自然堤防状に高く盛り上がる。本層からは遺物は出土していない。

上層（第 34 ～ 36 図）は､流路東側を中心に検出した灰～黒色系粘土（第 34 図 6 ～ 14 層）を分層する。穏やかな環境下で堆積した低湿地性堆積物で、本層堆積時には流路機能は大きく低下し、東西幅 11 m以上の低地帯として埋没地形にあったと考えられる。また、下位層を中心に炭化物が互層状に堆積し、周辺で火災などが生じた可能性が想像される。

遺物は、弥生土器や縄文土器浅鉢・深鉢などの小片のほか、上位層からの混入と考えられる古式土師器や中世土師質土器などの小片がコンテナ半箱程度出土した。やや縄文土器が多数を占める。縄文土器は胴部などの小片が多く、図化可能な資料はない。**140** ～ **142** は平基式の打製石鏃。**144** ～ **146** は、上下縁に敲打による潰れ痕を認める楔状石核である。また、いずれも表裏面もしくは裏面に磨滅痕を認めることから、打製石斧を転用した可能性が考えられる。**143**・**147** も、上下縁と左図右側縁に敲打による潰れ痕を認める楔状石核である。**143** は側面と下面に､**147** は左図右面にそれぞれ裁断面を認める。



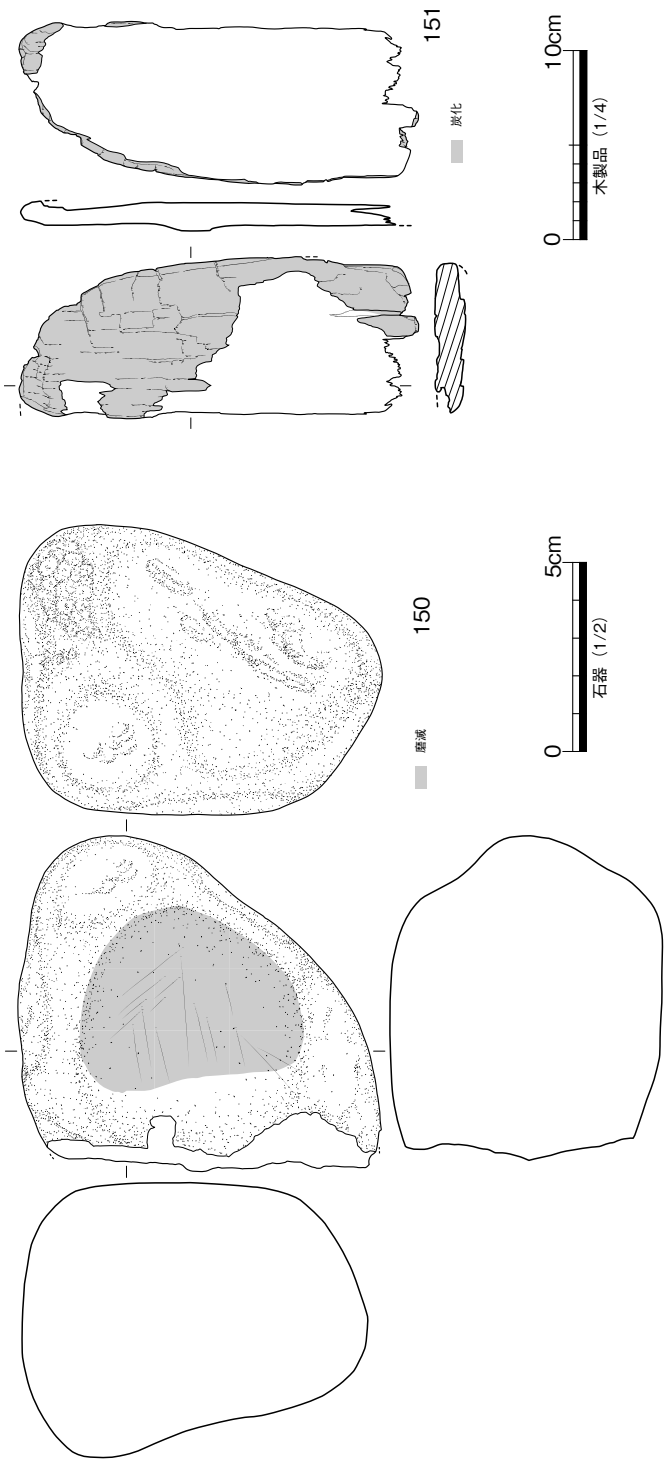
第 34 図　SR01 上・中層平・断面・出土遺物実測図 1



第 35 図　SR01 上層出土遺物実測図２

また、いずれも表裏面に強い磨滅痕や線状痕を認めることから、打製石斧を転用した可能性が考えられる。**148** は、周縁に敲打による潰れを認める石核で、左図左側縁と下面に自然面を残す。また、表裏面の中央部に敲打痕があり、叩石として転用したと考える。**149** は、細粒砂岩の扁平な円礫を利用した打欠石錘である。下層からの混入の可能性が高い。**150** は、石英の亜円礫を使用した磨石である。起伏の乏しい広端面１面に、強い磨滅痕と擦痕を認める。また、上端縁には一部に敲打痕を認め、叩石としても使用されている。**151** は、図上縁が弧状を呈するカヤの板目材で、用途は不明。欠損部を除き表裏面は強く炭化する。

中・上層の堆積時期を直接示す遺物に乏しいが、下層及び後述する最上層出土資料から縄文時代晩期後葉～弥生時代前期中葉までの時期幅のなかで、埋没したと考えたい。また、第４章第１節の分析に記載されているように、上層は堆積時･後に生物擾乱が進行し、同第２節の分析により、乾燥・滞水環境下にある本層堆積場を利用したイネの生産の可能性が指摘されている。遺物の出土状況とも整合的で、専ら生産地として利用されていた可能性が考えられる。



第 36 図　SR01 上層出土遺物実測図３

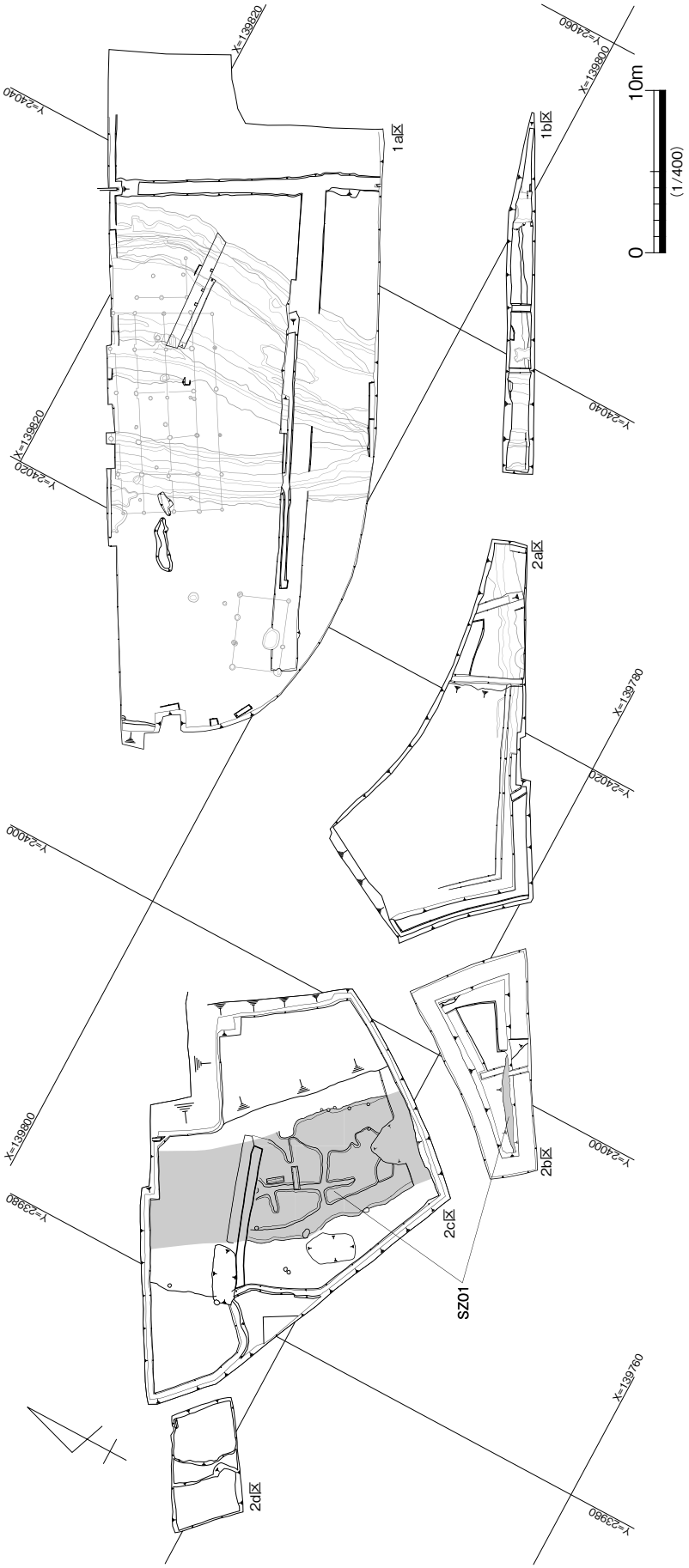
弥生時代前期

弥生時代前期の遺構は､上述した縄文時代晩期の自然河川の上面で検出した３面の小区画水田がある。堆積層はいずれも著しい擾乱を被り、第４章のプラント・オパール分析の結果からも、本堆積層を利用した水田経営の可能性が指摘されている。

水田

SZ01（第 38 図）

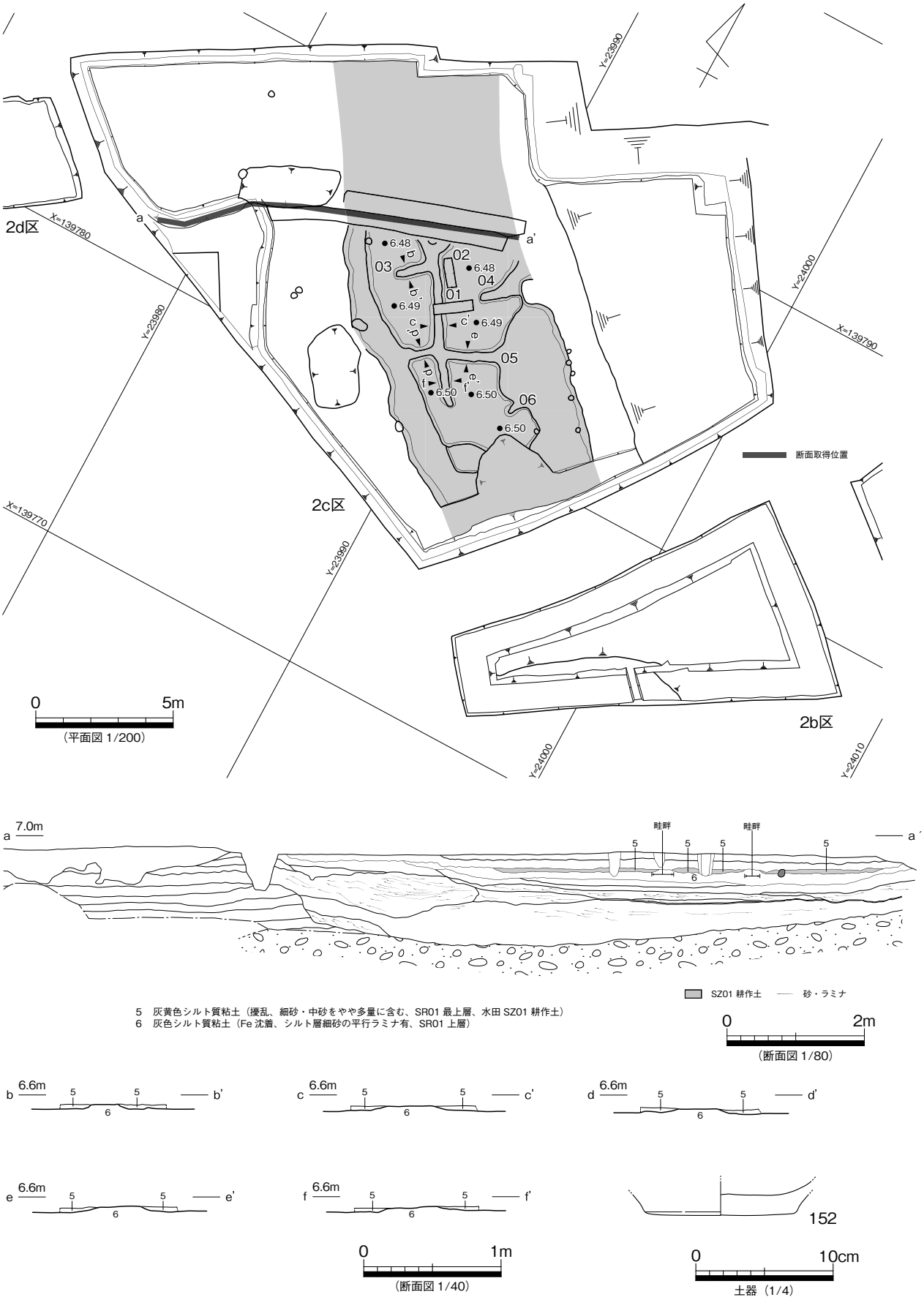
2c 区第２面、SR01 上面で検出した水田である。SR01 上層上面に堆積した灰黄色シルトを耕土層と



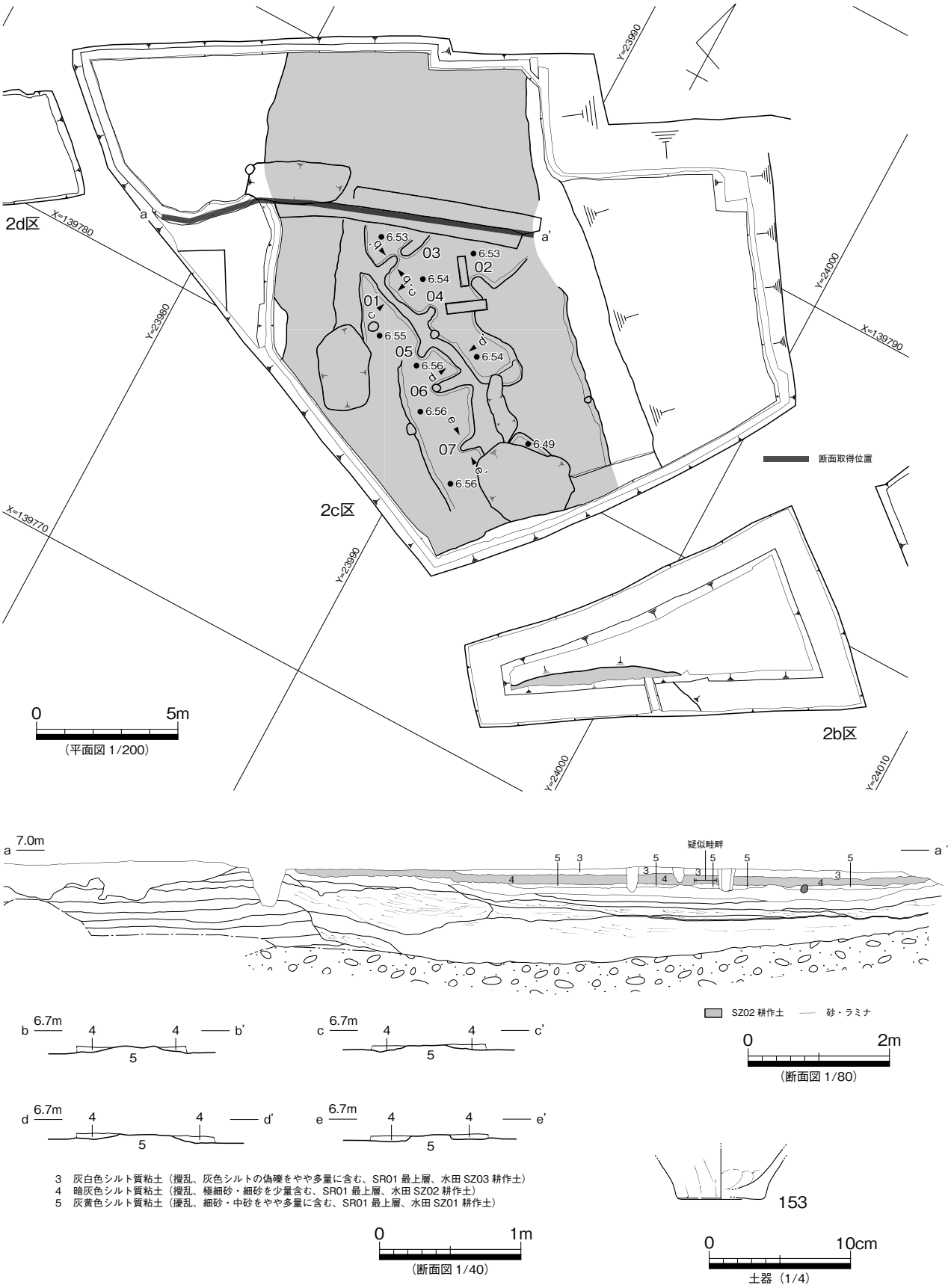
第37図　弥生時代前期遺構配置図

し、その下面で７筆の水田面を区画した小畦畔を検出した。耕土層の上面には、後述するSZ02の耕土層が堆積し、上面は大きく削奪され、東西約6.6ｍの範囲に、層厚0.04～0.08ｍが残存するに過ぎない。水田１筆の面積は2.0～3.9㎡程度の小区画に復元され、平面形は安定した形状を呈さない。検出された畦畔は、基底幅0.5ｍ前後、高さ約0.04ｍの小規模なもので、いわゆる大畦畔は認められない。畦畔の設定は、南北畦畔（畦畔01）をほぼSR01の流路方向に合致（N 32.97° W）して配し、その東西に概ね直交する東西畦畔（畦畔02～06）を配して、水田区画を造成したと考えられる。水田面の標高は、南部で6.50ｍ前後、北部で6.48ｍ前後と概ね北へ緩やかに傾斜し、南からの給水が想定される。

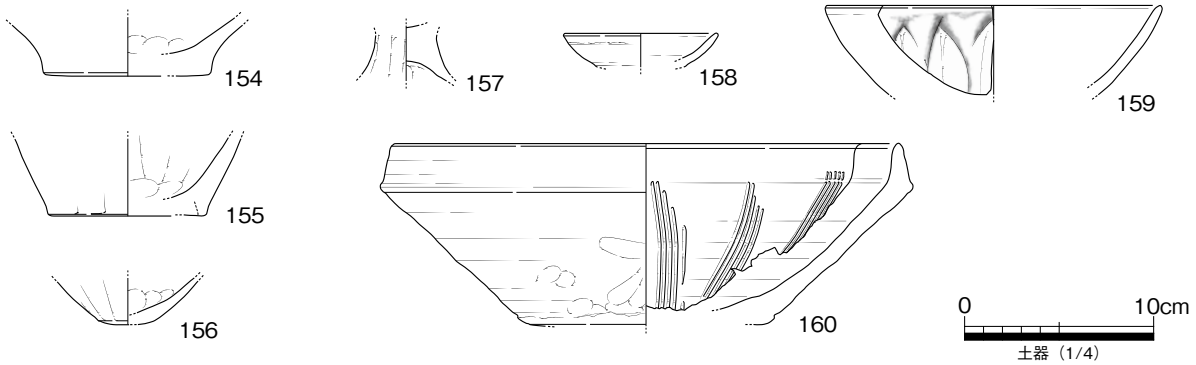
耕土層から、器種不詳の弥生土器のほか、上位層からの混入と考えられる須恵器や中世土師質土器などの小片が約30点出土した。**152**は弥生土器壺の底部片で、時期の特定は困難だが、弥生時代前期中葉を下限とするものと考える。



第 38 図　SZ01 平・断面・出土遺物実測図



第 39 図　SZ02 平・断面・出土遺物実測図



第 40 図　SZ03 出土遺物実測図

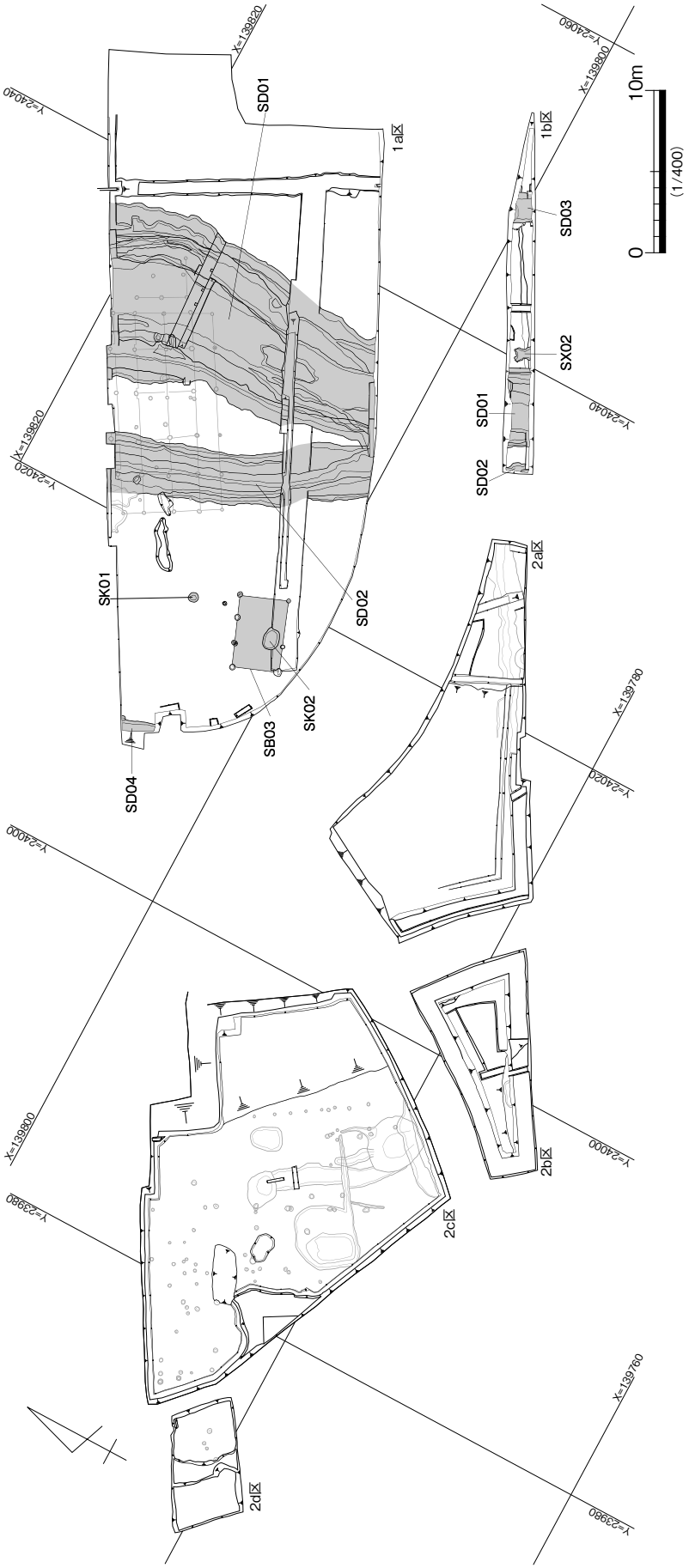
SZ02（第 39 図）

2c 区第２面、SR01 上面で検出した水田である。上述した水田 SZ01 の上面に水平堆積した暗灰色シルトを耕土層とし、耕土層下面で８筆の水田面を区画した小畦畔を検出した。耕土層の西端部は旧耕作土や造成土により、東端部は後述する溜池 SG01 にそれぞれ削奪され、東西約 9.4 mの範囲に残存する。層厚は 0.10 ～ 0.14 mを測り、上面は後述する SZ03 などにより削奪される。水田１筆の面積は 2.28 ～ 4.65 ㎡程度に復元され、平面形は安定した形状を呈さない。検出された畦畔は、基底幅 0.5 ～ 0.7 m、高さ約 0.04 mの小規模なもので、いわゆる大畦畔は認められない。畦畔の設定は、まずN 71.73° Wの東西畦畔（畦畔 01・02）を約 2.3 m間隔で設定し、その南北に直交ないし斜交する畦畔（畦畔 03 ～ 07）をそれぞれ配して、水田区画を造成したと考えられる。水田面の標高は、南部で 6.56 m前後、北部で 6.53 m前後と概ね北へ緩やかに傾斜し、南から給水されたと想定できる。また、耕土層下面の標高は、土層図実測位置で東半部は 6.50 m前後、西端部は 6.62 m前後と 0.12 m前後高く、同様な耕土層下面の立ち上がりは東縁部にも認められることから、水田は SR01 中央部へ向けて棚田状に造成されていた可能性が考えられる。

耕土層から、器種不詳の弥生土器のほか、上位層からの混入と考えられる中世土師質土器皿などの小片が約 25 点出土した。図化できたのは、**153** の弥生土器甕のみである。出土遺物から詳細な時期を特定することは困難だが、SZ01 との層位的な関係から、弥生時代前期中～後葉を中心とする時期と考える。

SZ03（第 40 図）

2c 区 SR01 上面で検出した、水田の可能性の高い耕土層を SZ03 として報告する。畦畔などの遺構は確認されておらず、その点で水田遺構とは断定できないが、SZ02 耕作土と酷似した色調・土質の水平堆積層であり、その可能性を想定する。本層上面から後述する中世 12 世紀を上限とする柱穴や土坑などが掘り込まれ、本層堆積の下限を示す。耕土層西縁は緩やかに立ち上がり、東縁は後述する SG01 により削奪され、東西約 6.5 mの範囲に、層厚 0.08 ～ 0.12 mが残存する。本遺構の時期は、概要報告（香川県埋蔵文化財センター 2018）では、耕土中の出土資料から「古代末～中世前半」とされていたが、本層からも弥生時代の遺物の出土がみられ、本層下面の西縁部の立ち上がり位置が、SZ02 の立ち上がり位置と概ね合致すること、SZ02 耕土層との間に古代末以前の堆積層が認められないことなどから、参考に後掲した弥生時代後期以降の出土資料は混入の可能性を考え、SZ01 から連続する３面の水田遺構として報告する。



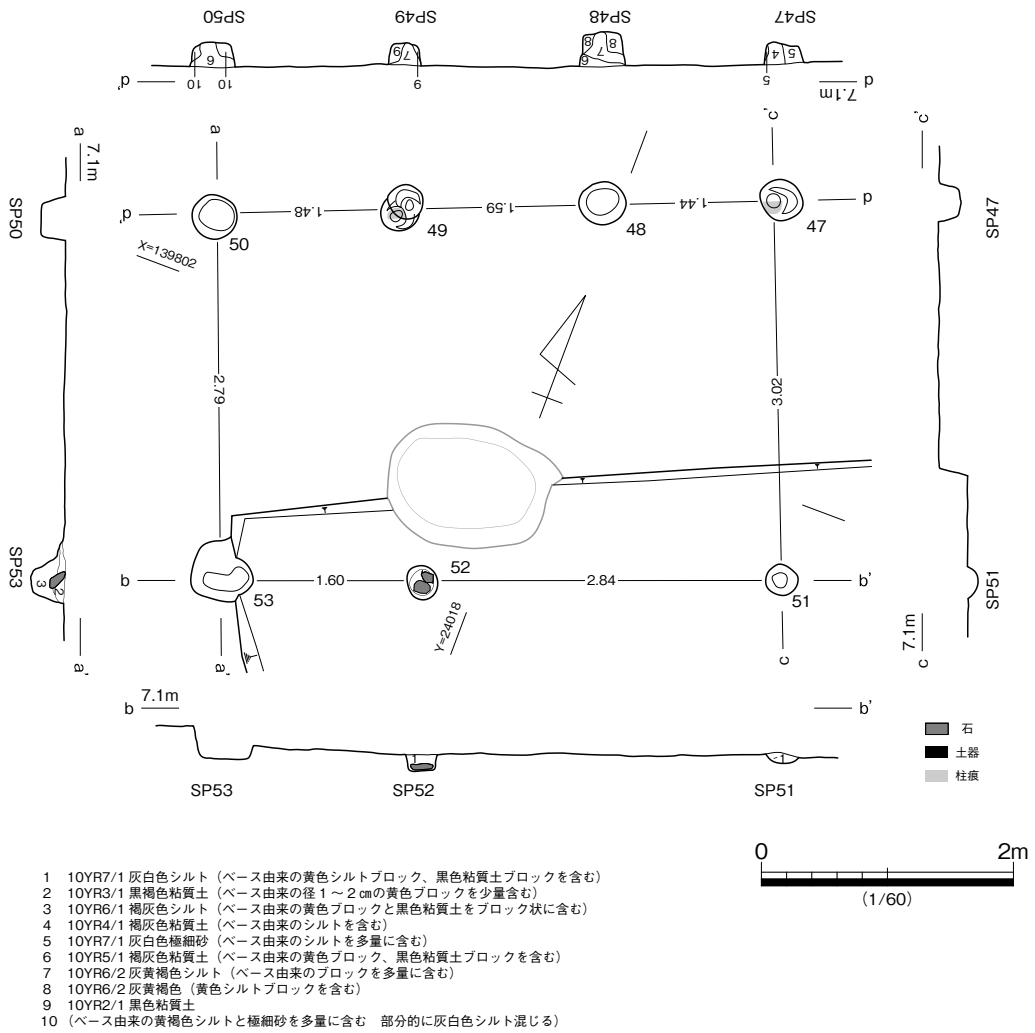
第41図　弥生時代後期～古墳時代前期遺構配置図

遺物は、縄文土器や弥生土器、中世土師質土器などの小片がコンテナ1/3箱程度出土した。出土遺物のうち大半は、時期を特定できない器種不詳の土器小片である。**154**・**155**は、弥生時代前期の壺・甕の底部片である。細かな時期を特定することは困難だが、本資料が本水田面の時期を示す資料と考える。**156**・**157**は弥生時代後期後葉～終末期前後に位置付けられる小形鉢や高杯の小片。**158**は、土師質土器皿ＢⅡ類。12世紀前半代に位置付けられる。**159**は龍泉窯系青磁碗Ⅱ-b類。**160**は備前焼擂鉢。内面はよく使い込まれて磨滅する。乗岡編年中世５期、15世紀後半代に位置付けられる。

弥生時代後期～古墳時代前期

当該期の遺構は、１区の微高地を中心に検出した。２区低地部の埋没は進行したとみられるが、上面の削奪などにより具体的な土地利用の様相は不明である。１区では、大型幹線水路SD01・02を中心に枝溝とみられ

る SD03 が東に配され、水路西側の微高地縁辺に掘立柱建物 1 棟（SB03）や数基の土坑（SK01・02 等）が検出された。幹線水路群からは多量の遺物が出土しており、調査区周辺に近接して集落域が展開する可能性が高いと考えられる。



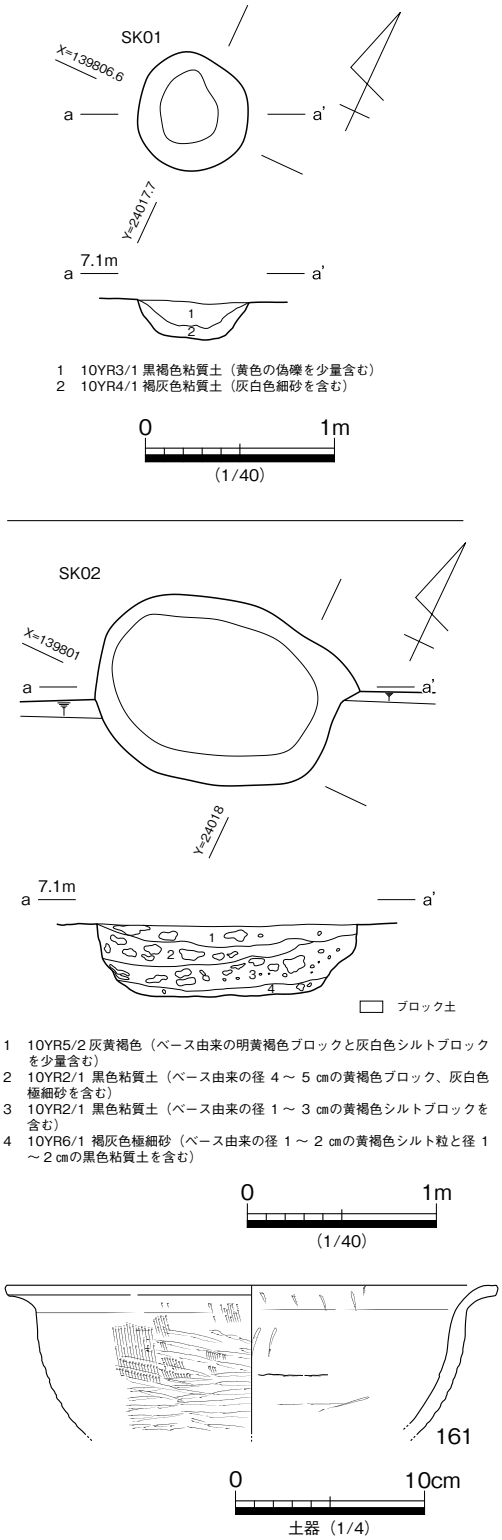
第 42 図　SB03 平・断面図

掘立柱建物

SB03（第 42 図）

1a 区南西部で検出した東西棟の掘立柱建物である。SK02 と重複するが、柱穴との切り合い関係はない。梁間 1 間（2.91 m）、桁行 3 間（4.48 m）、床面積 13.04㎡、主軸方向N 68.99° E に配された側柱建物として復元する。桁行南列東から 2 穴目の柱穴を欠く。また、北列西から 2 穴目は、ほぼ同位置で同規模の柱穴が重複しており、改築の可能性も考えられる。なお、土層図は後出する柱穴のものを図示した。柱穴は、長軸 0.24 ～ 0.49 mの平面楕円ないし不整方形状を呈し、残存深 0.18 ～ 0.28 mで、断面形は概ね逆台形状を呈する。桁方向の柱間間隔は、1.44 ～ 1.60 mを測り、柱列は概ね揃っている。柱穴底面の標高は、6.60 ～ 6.80 mと一定せず、やや南列の柱穴が深く掘り込まれている傾向にあるようだ。桁行北列の柱穴を中心に、径 0.15 m前後の柱痕を確認した。また、南列 SP53 の柱穴底面で板状の石材による根石が出土している。

遺物は、SP51 から器種不詳の土器小片 1 点が出土したのみである。出土遺物から時期を特定することは困難だが、建物主軸方向が遺跡周辺の条里型地割の方向と一致しないこと、周辺遺構との関係を踏まえ、当該時期の遺構の可能性を想定し報告する。



第 43 図　SK01・SK02 平・断面・出土遺物実測図

土坑

SK01（第 43 図）

1a 区西部で検出した土坑である。長軸 0.61 m、短軸 0.58 m の平面略円形を呈し、残存深 0.21 m で、断面形は底面が概ね平坦な逆台形状を呈する。埋土は２層に細分され、褐色系粘質土がレンズ状に堆積していた。

遺物は出土しておらず、詳細な時期を特定することは困難である。近接して本時期の建物 SB03 が所在し、埋土の特徴などから、当該期の遺構の可能性を想定する。

SK02（第 43 図）

1a 区南西部で検出した土坑である。既述したように、SB03 と重複するが、切り合い関係にはない。平面形は、長軸 1.39 m、短軸 0.97 m の概ね隅丸長方形を呈し、残存深 0.38 m を測り、断面形は底面が概ね平坦な逆台形状を呈する。埋土は４層に細分された。上位３層中には多量のブロック土が混在し、最下層は褐灰色極細砂で自然堆積層と考えられ、一定期間オープンな状態で放置された後、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

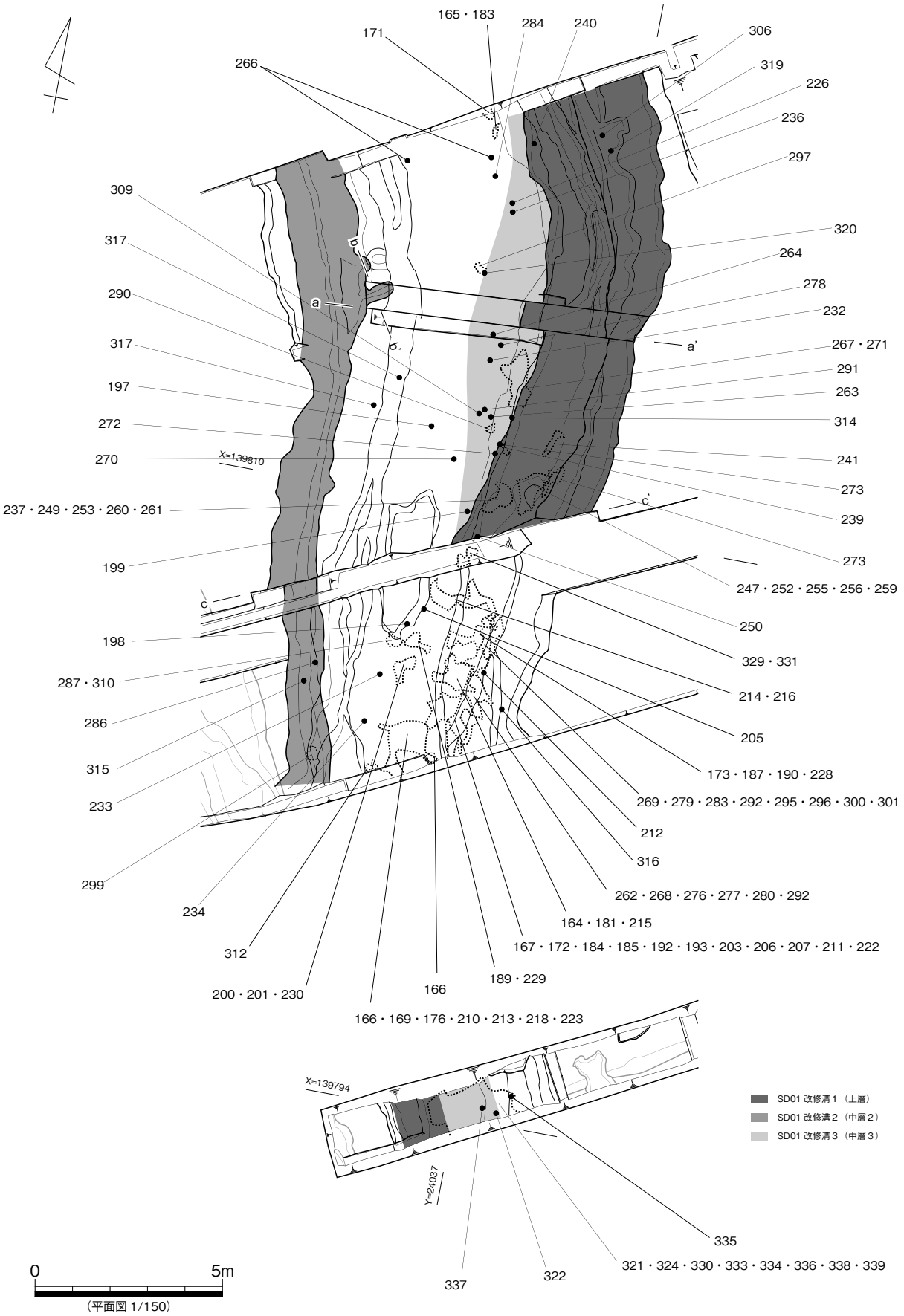
遺物は、図示した以外には器種不詳の土器小片 10 点程度が出土したのみである。**161** は、外反して開く口縁部を有する弥生土器中形鉢である。小片のため、復元径にやや難がある。出土遺物は乏しいが、終末期古段階を前後する時期に位置付けられる。

溝

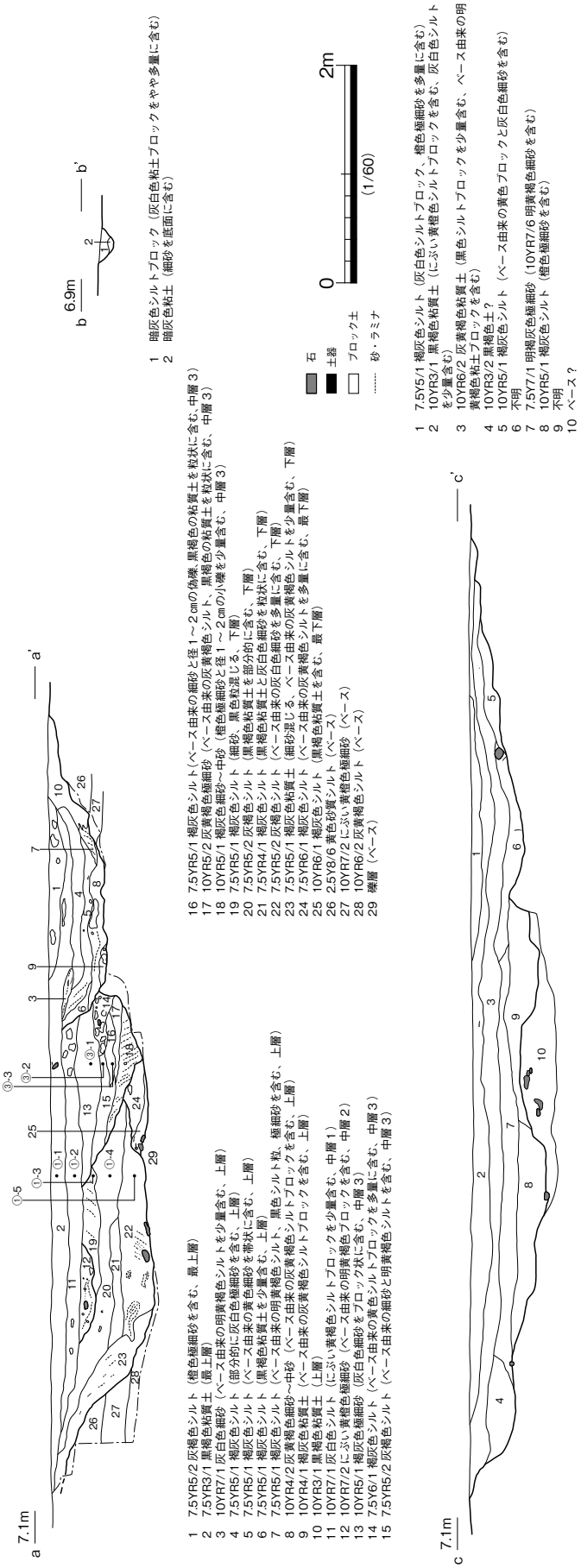
SD01（第 44 ～ 53 図）

１区中央部で検出した大型幹線水路である。1b 区西半部から 1a 区にかけて北へ流下し、1a 区北半部で緩やかに屈曲して北西方向へ流下方向を変更する。1a 区南端部で後述する SD02 と重複し、切り合い関係から後出する。検出面幅 6.3 ～ 10.9 m、残存深約 1.0 m を測る。溝底面の標高は、1b 区で 6.2 m前後を、1a 区北端で 5.8 m前後をそれぞれ測り、高低差から北へ流下していたと考えられる。埋土の観察は、調査区壁面と溝延長部に設けた土層観察用の畔の計４か所で行ったが、後述するように溝改修の単位が明瞭に観察された a -a ´ 断面（第 45 図）を基準に以下記載する。

最上層（同図１・２層）は、溝放棄後の窪地を埋める自然堆積層である。本層上面から後述する中世の建物遺構が開削される。後述する建物柱穴の残存深から、遺構上面は大きく削奪されていると考えら



第 44 図　SD01 平面図



第45図　SD01 断面図

れ、現状では実証が困難だが、基本的に本層の堆積により溝は完全に埋没していたと考える。

上層（同図３～10層）は、本溝最終次の改修溝１の堆積層を分層する。溝は、幅約2.9ｍ、残存深約0.4ｍを測り、断面形は底面がほぼ平坦な逆台形状を呈する。埋土は８層に細分され、溝底面に細～中砂の流水堆積層が認められる。

中層１（同図11層）は、後述する改修溝２・３上面に堆積した灰白色シルトで、改修溝２・３埋没後に堆積した自然堆積層と考える。改修溝２・３上面を広く覆いレンズ状に堆積し、東端は改修溝１に切られる。したがって、改修溝２・３埋没後改修溝１開削までの間、本溝は低地状を呈して放棄されていた可能性が考えられる。

中層２（同図12層）は、改修溝２の埋土を分層する。本土層図では、改修溝２の本体は図西側にあり記録されていないため、埋土などの情報は不明である。平面記録から、幅1.0～1.8ｍ、残存深0.2ｍと復元される。

中層３（同図13～18層）は、改修溝３の埋土を分層する。溝は、幅約1.8ｍ、残存深0.6ｍで、断面形は概ね逆台形状を呈する。埋土は６層に細分され、本溝でも底面に細～中砂の流水堆積を認める。また、上位層はブロック土が多量に含まれ、人為的に埋め戻された可能性も考えられる。

下層（同図19～23層）は、改修溝４の埋土を分層する。溝は、幅約3.2ｍ、残存深約0.9ｍを測り、断面形は底面がほぼ平坦な逆台形状を呈する。埋土は５層に細分され、本溝でも底面に細

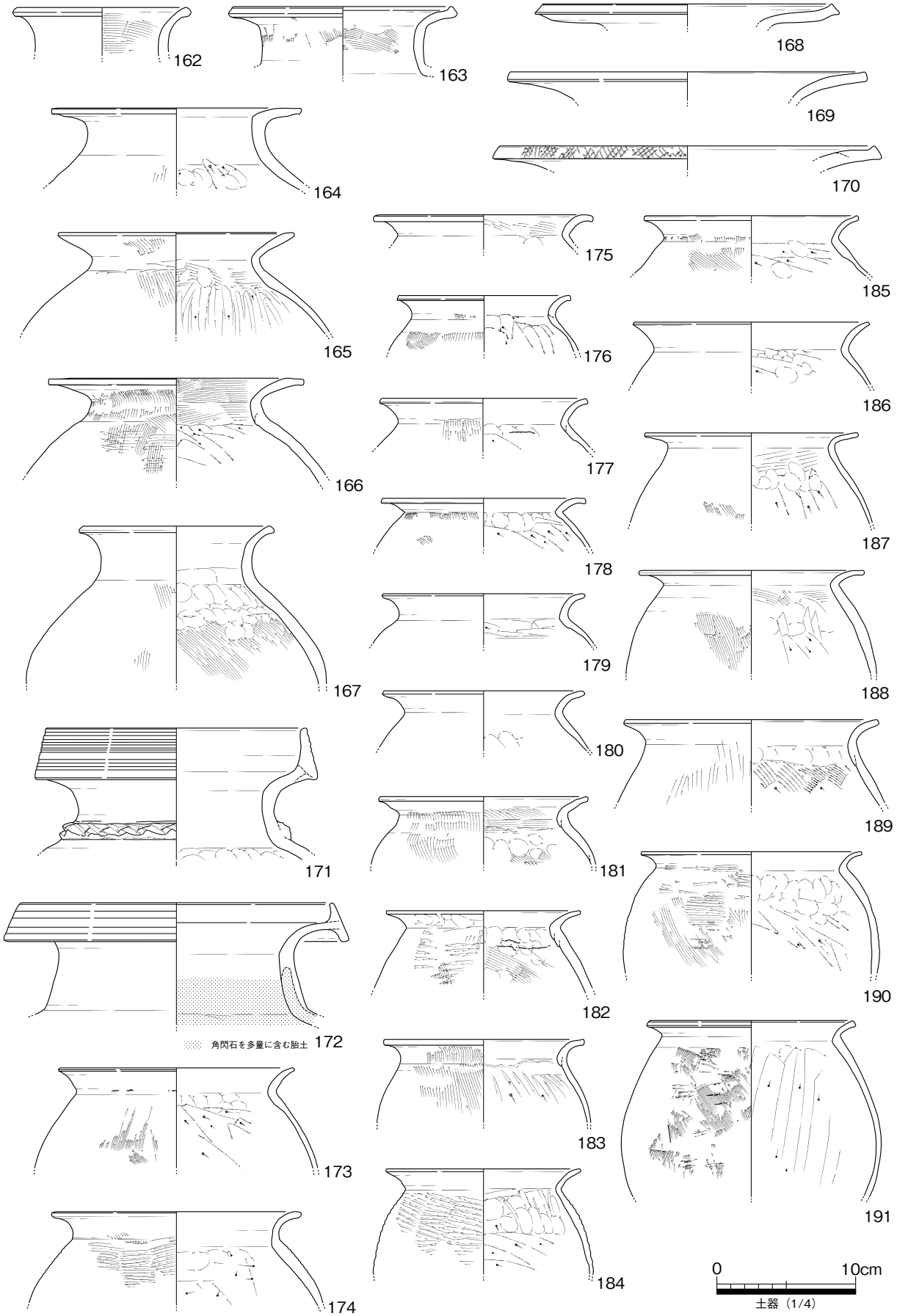
砂の堆積を認める。なお、埋土 19 ～ 22 層は 23 層を上面から切り込んで堆積しており、本溝は新旧２時期に細分される可能性が高い。

最下層（同図 24・25 層）は、溝底面で確認した本溝開削期の堆積層と考えられる埋土を分層する。改修溝３・４に大きく削奪され、溝の規模など詳細は不明である。

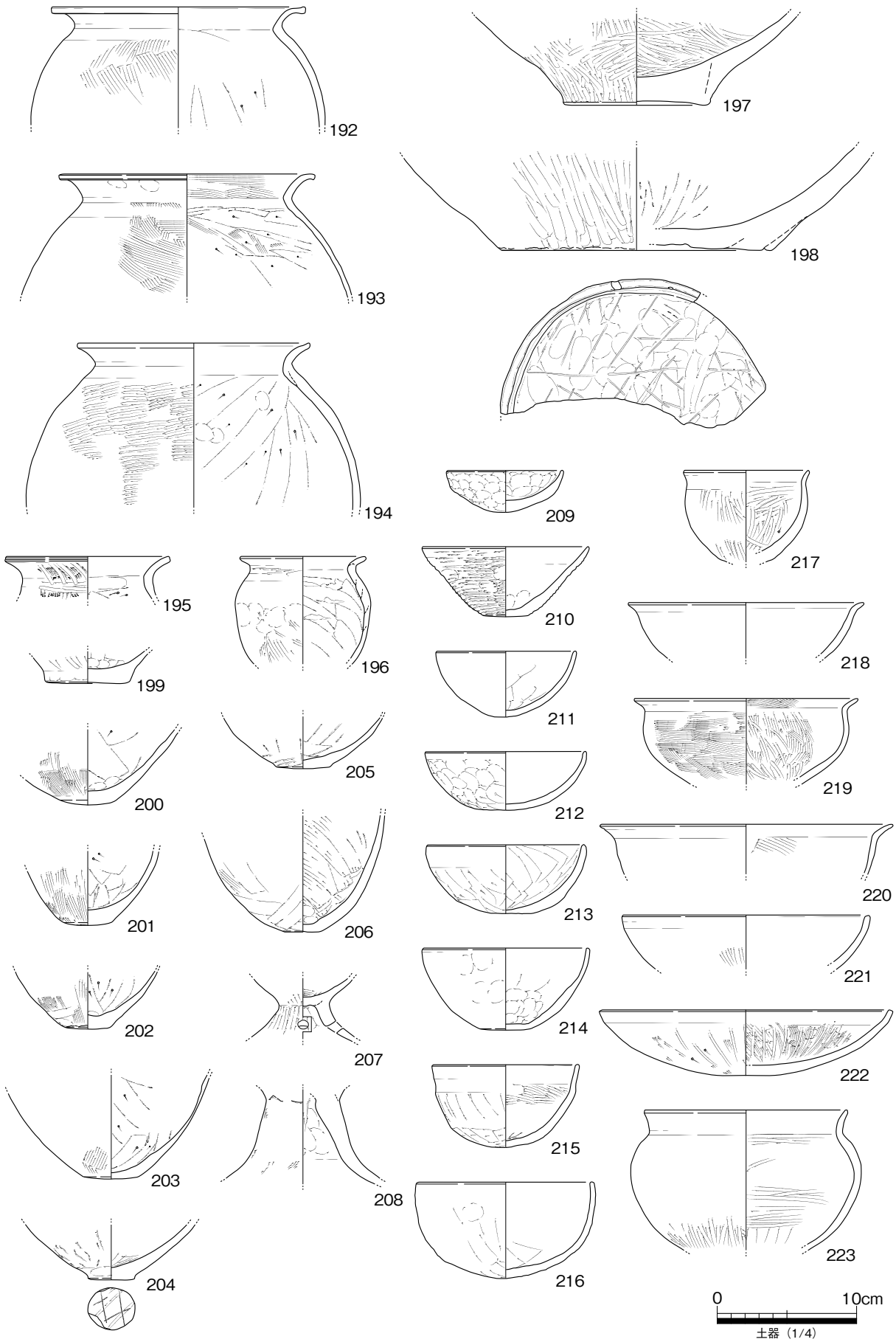
本溝からは、28 ℓ 入りコンテナ 25 箱と多量の土器や石器などの遺物が出土した。遺物の出土層位には大きな偏りがあり、最上層と上層、中層３、下層の４層のみから出土し、その他の堆積層からは出土していない。また、中層３については、器種不詳の弥生土器などの小片約 30 点が出土したのみで、図化可能な資料は出土していない。したがって以下では、最上層と上層、下層出土のそれぞれの資料について報告する。

162 ～ **236** は下層出土の遺物である。まとまった量の資料が出土しているが、小片化した資料が多く全形が分かる資料に乏しい。**162** ～ **170** は、広口壺及び短頸広口壺である。頸部から口縁部の屈曲が鈍く、口縁部が短い **162** や **167** は、後期前半に遡る可能性がある。また、口縁部が内湾する **168** は、古墳時代前期に下る可能性が高い。**171**・**172** は二重口縁壺ないし複合口縁壺である。**171** では頸基部に突帯を貼付するが、本地域ではこうした突帯は、後期後半新段階前後に複合口縁壺や広口壺の装飾として、西部瀬戸内域からの影響により導入され、以後古墳前期古段階前後まで継続する。**172** の複合口縁壺では、頸基部付近の内面は角閃石細粒を多量に含む、灰黄褐色を呈する粘土により成形され、一方頸部外面から口縁部にかけては、角閃石粒が乏しく橙色を呈する粘土が使用され、明らかに両者の胎土は異なり、採取地を異にする２種類の粘土を使用して、本資料を製作したことは明らかである。体部以下が不明なため、視覚的効果を意図した粘土の選択なのか、製作途中で角閃石を多量に含む粘土を消費してしまったために、異なる粘土を使用せざるを得なかった偶然性によるものかは明らかではないが、こうした異なる粘土を使用した土器の出土が極めて乏しいことからすれば、後者の可能性も皆無ではなかろう。なお、両者の粘土採取地などを明らかにするため、それぞれの粘土の分析を実施した。分析の結果、いずれも砂粒組成の点では深成岩とテフラを主体とする点で共通するが、頸基部付近の粘土は断層ガウジを用いた土器の特徴に近く、口縁部側の粘土は淡水成粘土にイネ藁を焼いた灰を混和した可能性が指摘され、両者の粘土採取地が異なることが示された。

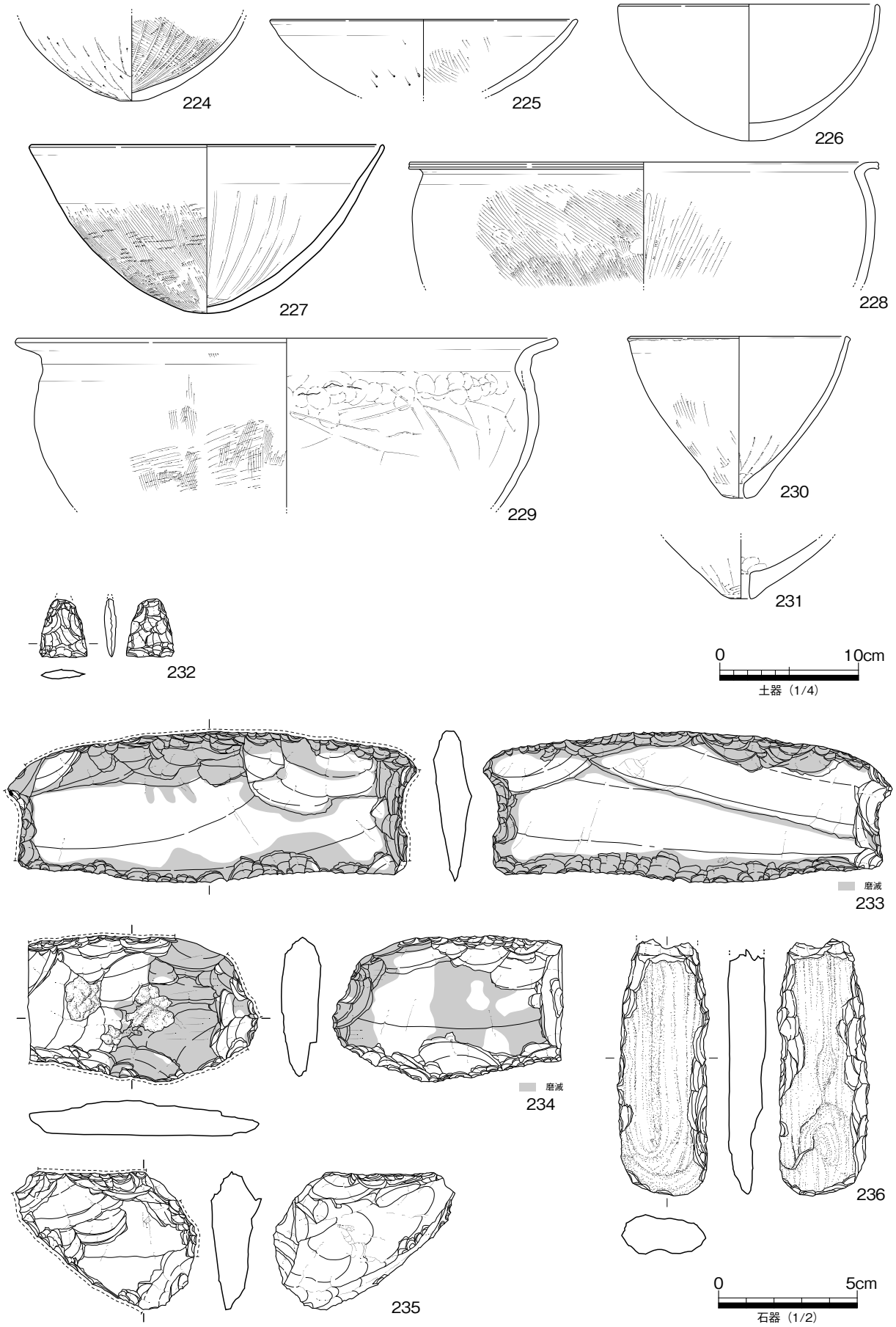
173 ～ **194** は甕である。いずれも口縁部は緩やかに外反して開き、端部は小さく矩形もしくは丸く成形するものが多数を占める。端部を拡張して端面を凹線や沈線で加飾するものは皆無で、また体部も球胴状を呈するとみられるものが多く、この点で後期後半以降の特徴を有する。いわゆるタタキ甕も一定数認められるが、タタキ痕をハケ調整で消すものがやや多数を占めるようだ。**195**・**196** は壺や甕の小形品。**197**・**198** は弥生時代前期に遡る壺の底部片。本遺構からは、前期の土器は下層を中心に少量出土している。出土状況から混入の可能性が高いと考えるが、２区で当該期の水田などの遺構が検出されているように、周辺に弥生時代前期の集落が経営されていた可能性を示唆するものと考える。なお、**198** の底部外面には、板状の圧痕をナデで消した後、斜格子状の線刻が施されている。**199** ～ **206** は壺や甕の底部片である。突出した平底を呈する **199** と **204** が後期前半～後半古段階に位置付けられる以外は、小さな平底や凸面底を呈し、後期後半新段階以降に下る資料が多い。**207**・**208** は高杯の脚部を中心とした小片。本遺構からの高杯の出土は乏しく、本層では２点を図化し得たに過ぎない。**209** ～ **229** は鉢である。各形式のものが出土しヴァリエーションが豊富だが、底部は小形鉢を中心に丸底化しており、終末期前後に位置付けられるものが多数を占めるようだ。また、内外面に指頭圧痕を多数残す



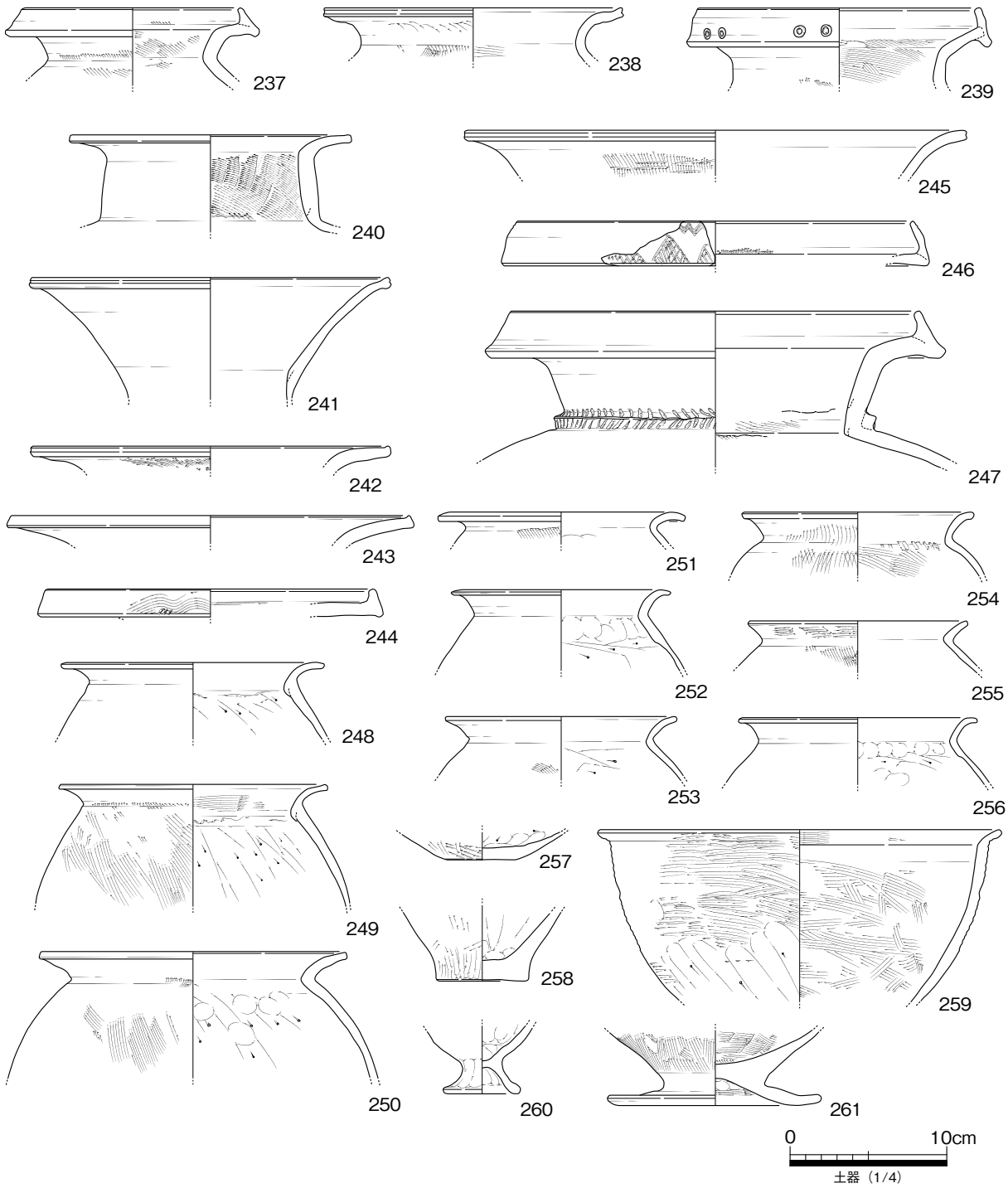
第 46 図　SD01 下層出土遺物実測図 1



第 47 図　SD01 下層出土遺物実測図２



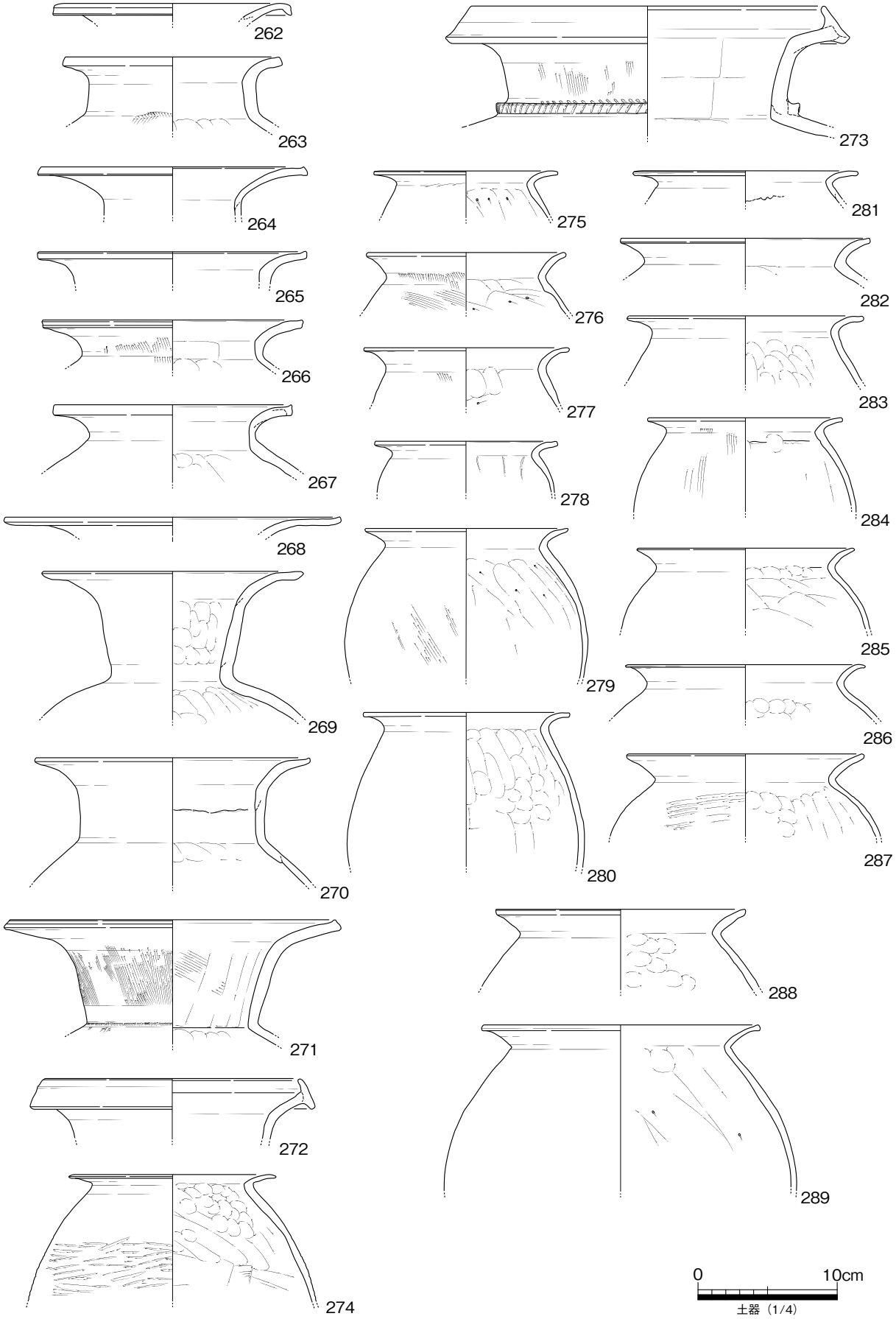
第 48 図　SD01 下層出土遺物実測図３



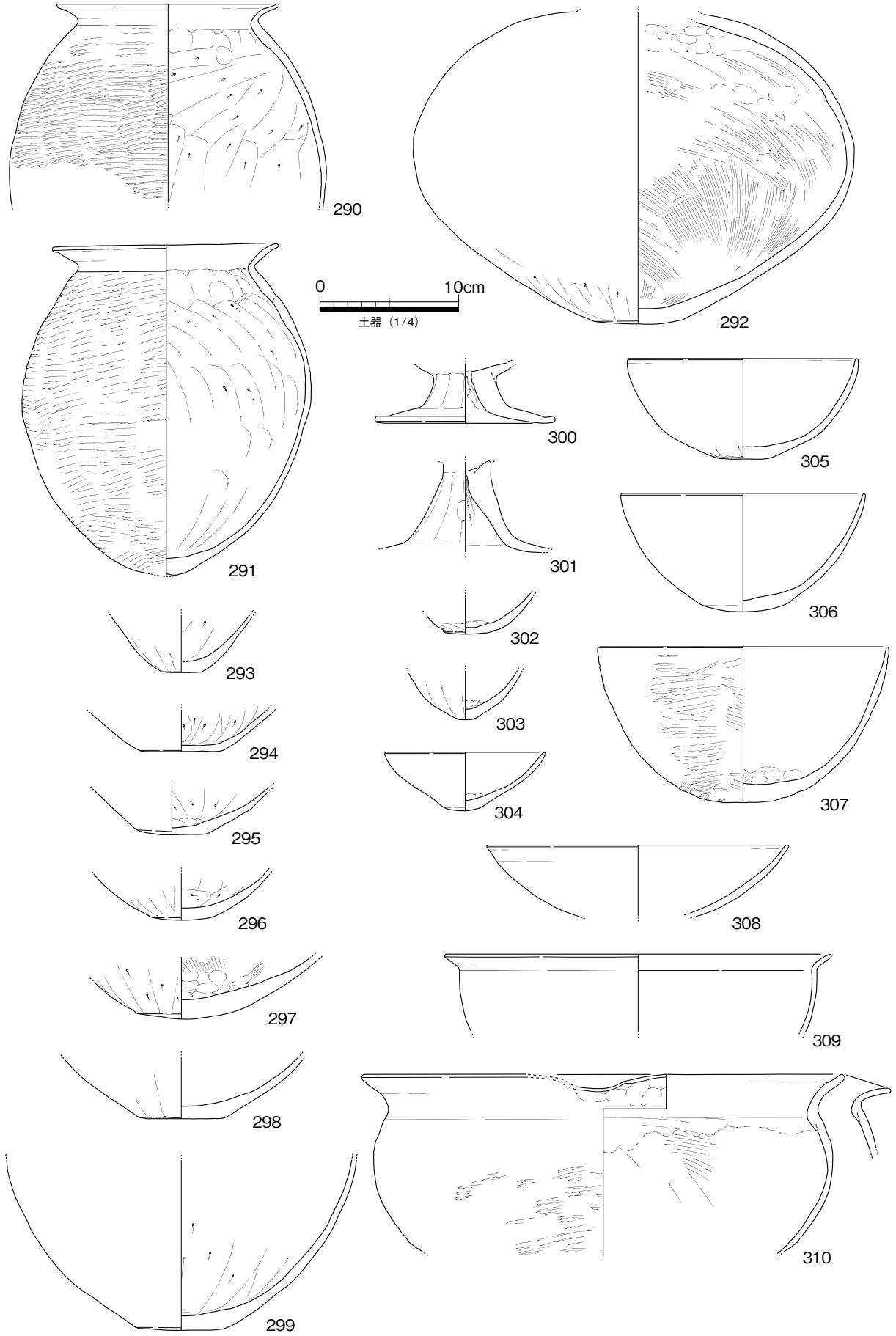
第 49 図　SD01 上層出土遺物実測図

小形鉢 **209** は、古墳前期前半古段階に下る。**230**・**231** は、濾過機としての用途が想定される底部有孔鉢である。**231** の胎土中には結晶片岩粗粒が含まれ、徳島県吉野川流域からの搬入資料の可能性が高い。**230** は全形が分かる資料で、本器種としては小形品である。

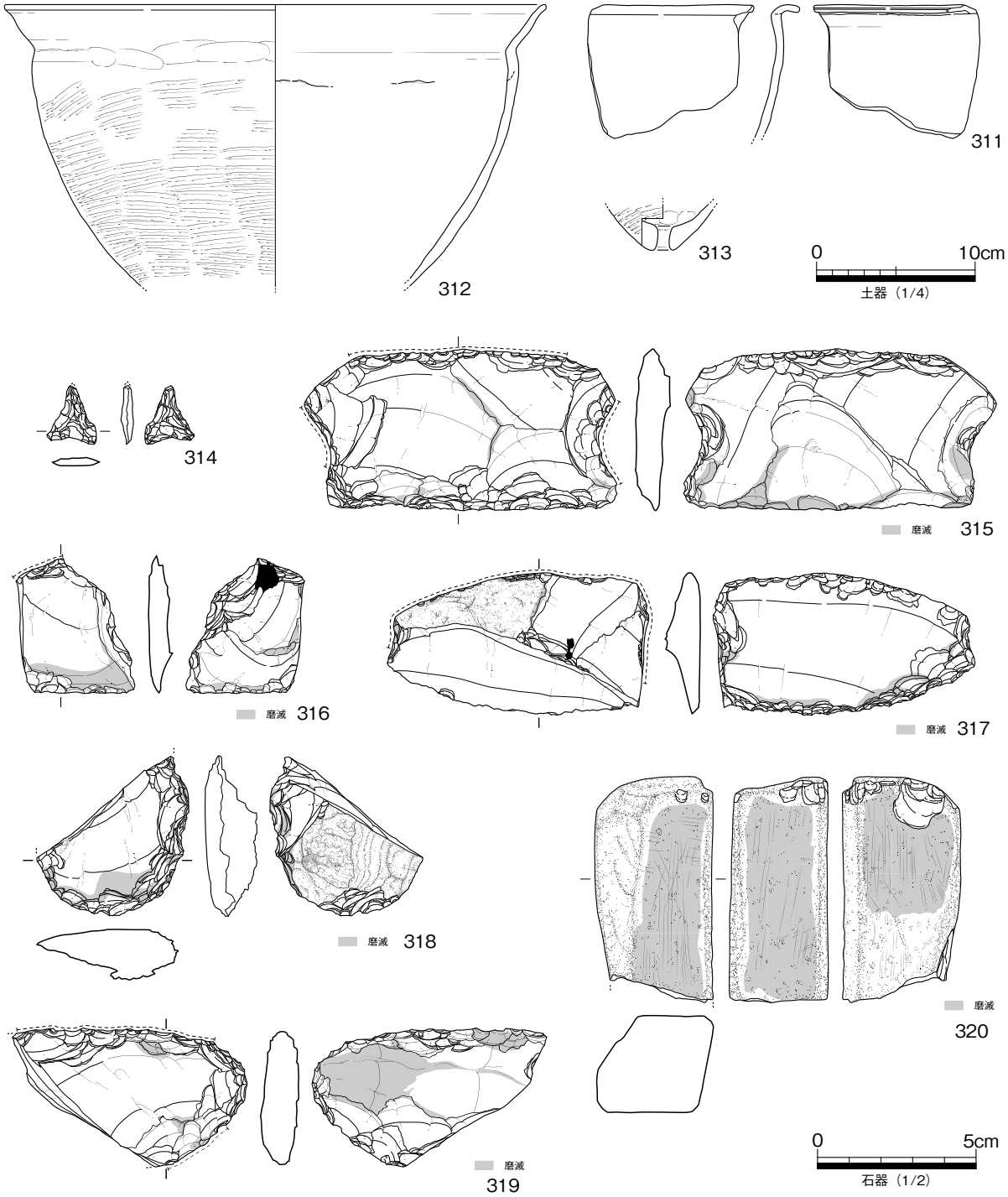
232 ～ **236** は石器・石製品である。**232** は平基式の打製石鏃。**233** は、ほぼ完形の打製石庖丁で、背部には敲打による刃潰しを行い、両側に抉りを伴う。また、表裏両面に使用による磨滅痕を認める。**234** は、表裏面に強い磨滅痕と線状痕、上下縁を中心に敲打による潰れを認め、打製石斧を転用した楔



第 50 図　SD01 最上層出土遺物実測図 1



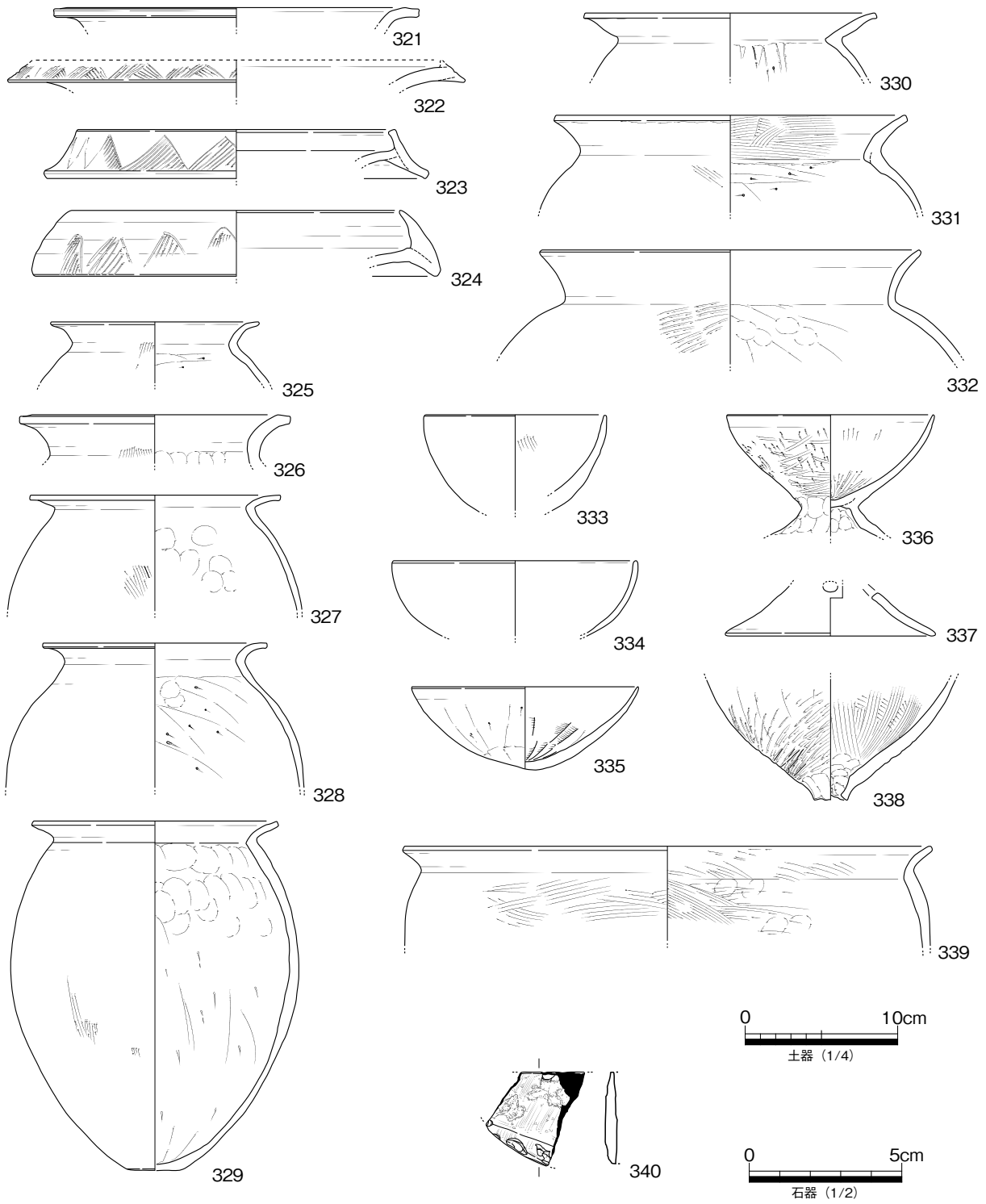
第 51 図　SD01 最上層出土遺物実測図２



第 52 図　SD01 最上層出土遺物実測図３

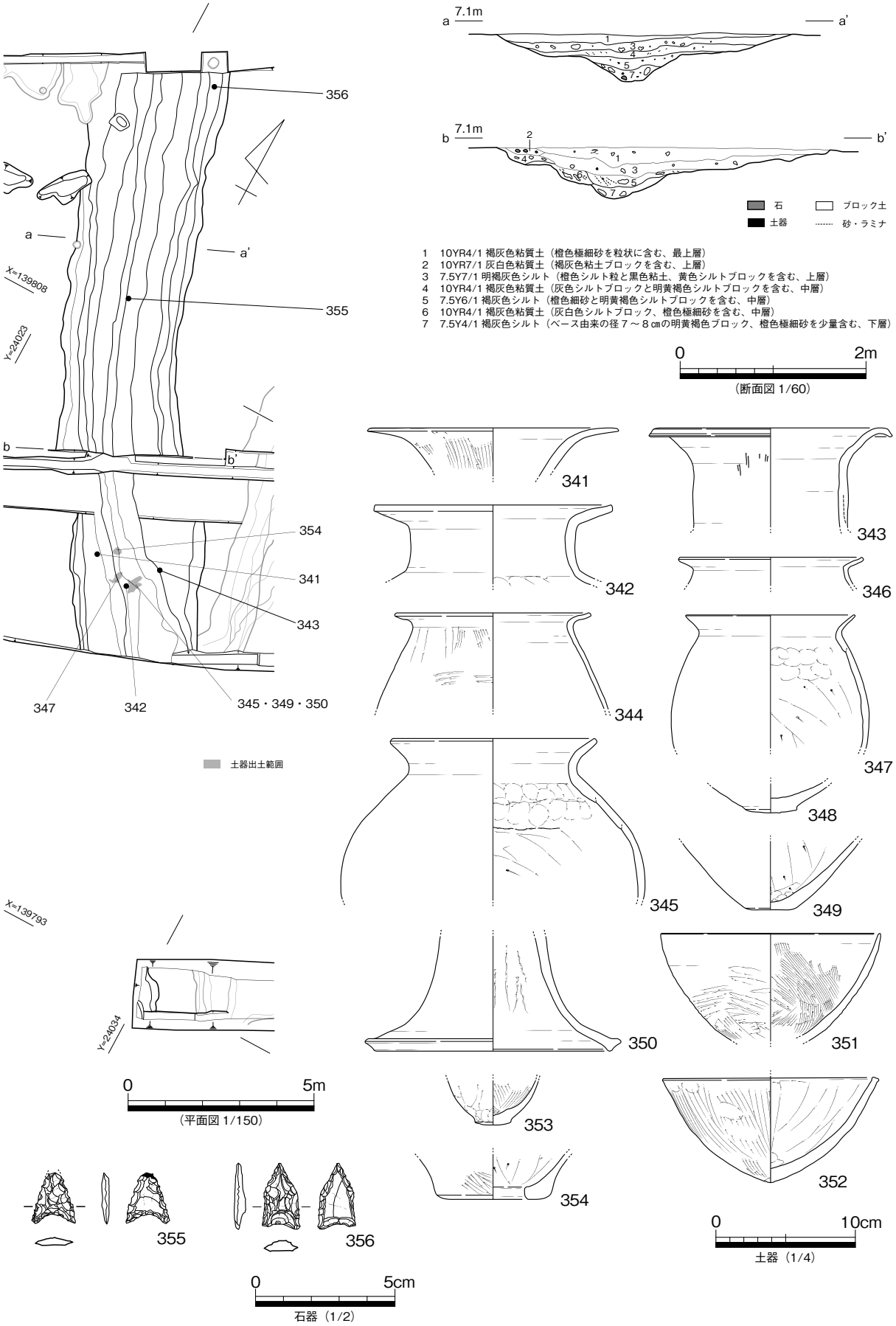
形石核と考える。図左面には一部に自然面を認める。**235** は楔形石核で、上下縁に敲打による潰れを認める。**236** は、細長い板状の結晶片岩の自然礫の左右側縁に若干の加工を加えた用途不明の石器で、明確な使用痕は認めない。図下端部はやや薄くなっている。

以上のように、本層出土資料は、一部に弥生時代後期前半に位置付けられるものも認められるが、安定して出土しているのは後期後半新段階以降であることから、本溝の開削時期は後期後半新段階前後で、終末期にかけて機能した可能性を考える。

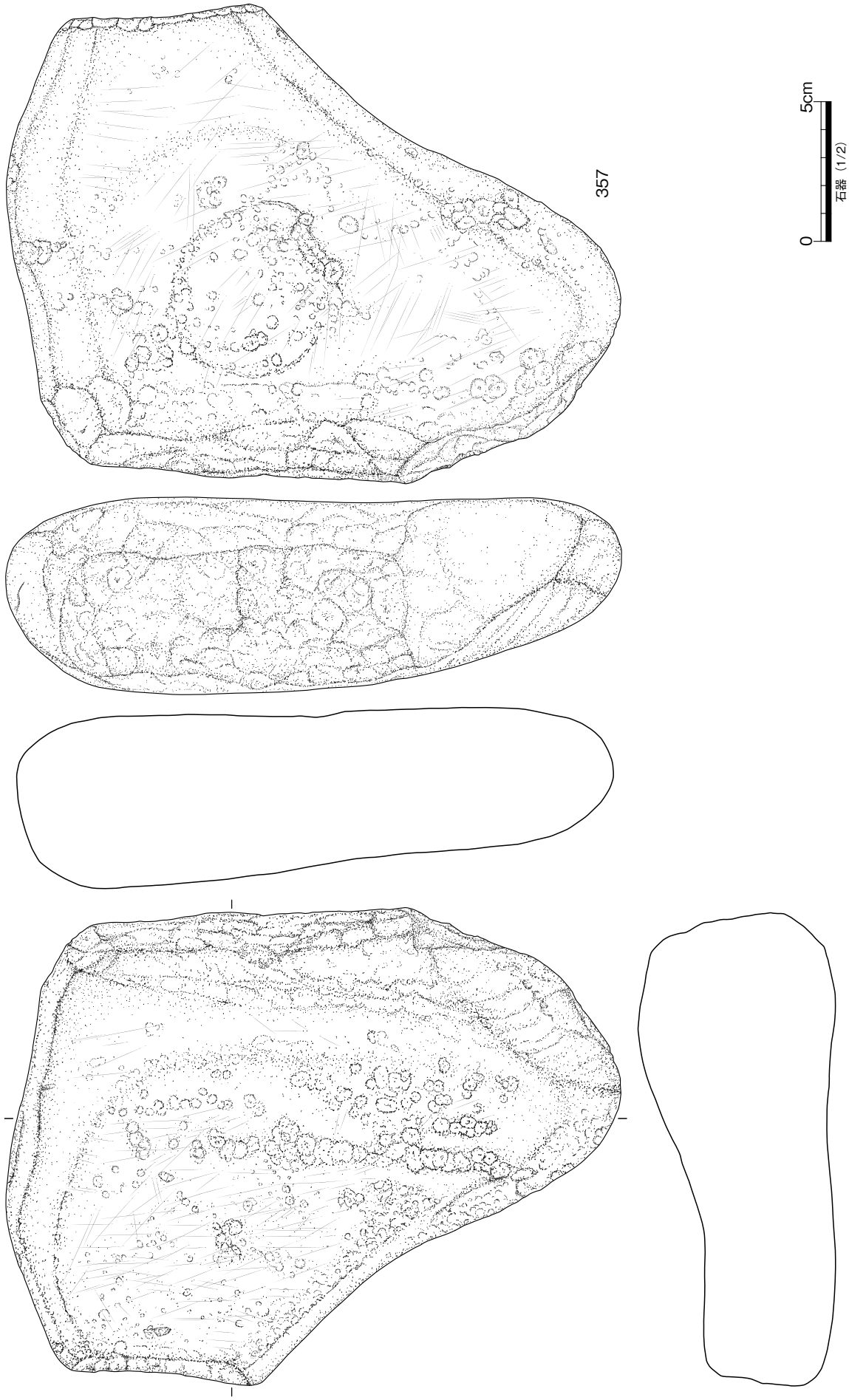


第 53 図　SD01 層位不明遺物実測図

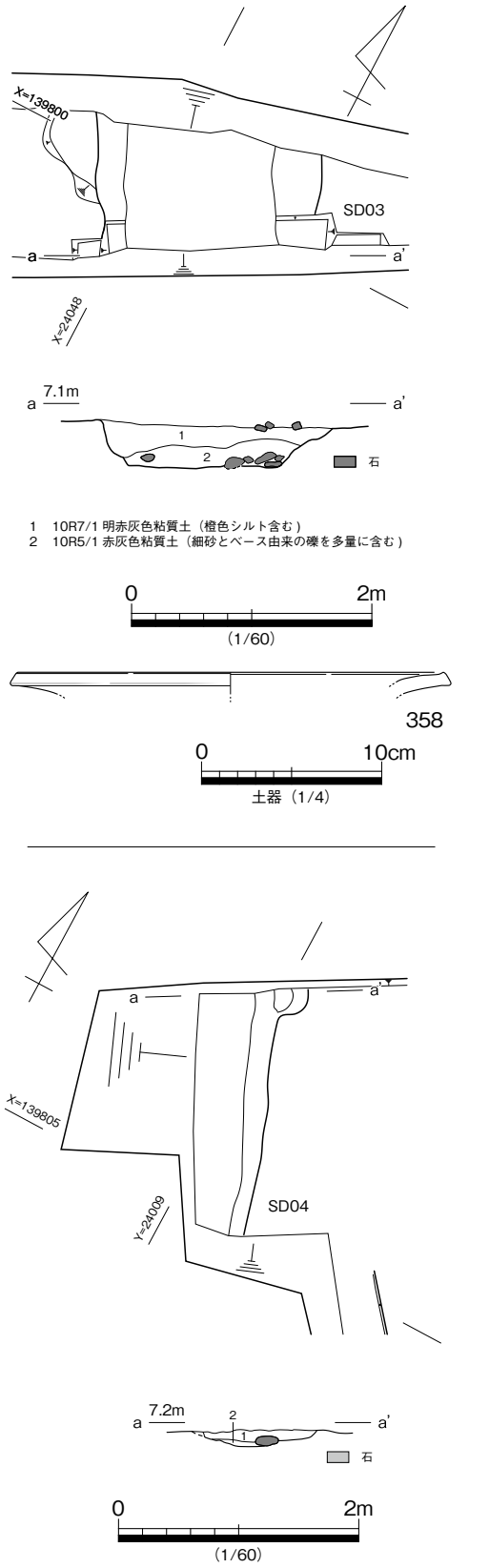
237 ～ 261 は、上層出土の資料である。本資料も、小片化したもののみであり、時期的な位置付けの困難な資料が多い。また、出土した資料数も下層や最上層と比較すると乏しい。広口壺 238・240 ～ 245、複合口縁壺 237・239・246・247、甕 248 ～ 256、鉢 259、台杯鉢 260・261 がある。短い口縁部を有する広口壺 240 や口縁部外面に複線鋸歯文で加飾した複合口縁壺 246、突出した平底の甕 258、台付鉢 261 などは、下層などからの混入と考えられる資料である。複合口縁壺 246 の口縁部の線刻部



第 54 図　SD02 平・断面・出土遺物実測図 1



第 55 図　SD02 出土遺物実測図 2



第 56 図　SD03・SD04 平・断面・出土遺物実測図

には、ベンガラとみられる赤色塗彩の痕跡が残る。緩やかに外反して開く口縁部の広口壺 241 から、弥生時代終末期新段階～古墳時代前期前半古段階を本層の埋没の下限として想定する。

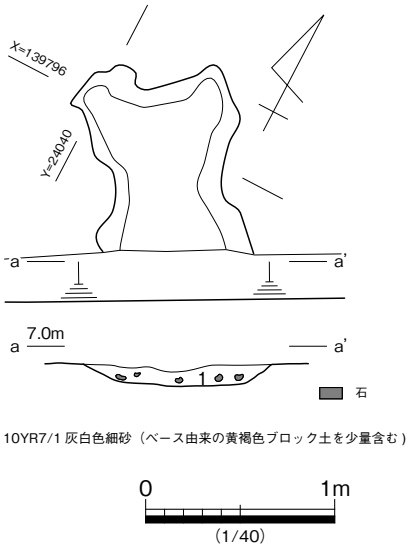
262 ～ 320 は最上層出土の資料である。広口壺 262 ～ 271、複合口縁壺 272・273、甕 274 ～ 291、高杯 300・301、鉢 302 ～ 312、底部有孔鉢 313 がある。体部がほぼ完存する壺 292 や完形に近く復元される甕 291 を含み、上･下層と異なり資料の残存状態は良好で、また資料数も各層の中で最も多い。遺構上面が大きく削奪されている可能性は高いものの、既述したように溝放棄後の窪地を埋める自然堆積層と考えられ、日常残滓の廃棄場所として投棄された資料群と考えられる。時期的に古く位置付けられる資料は、上層以下の各層からの混入などの可能性を想定するが、量的には少数である。291 は、いわゆるタタキ甕である。底部は不整形で、焼成時もしくは使用時に剥離した可能性が高い。300 は高杯の脚部片である。脚軸部は多角形状にメントリされ、裾部は大きく開く。杯底部中央には、焼成前に小円孔が穿たれる。

314 ～ 320 は石器・石製品である。314 は凹基式の打製石鏃。表面は風化が顕著である。315 ～ 317 は打製石庖丁である。315 はほぼ完形品で、背部には敲打による刃潰しを行い、両側に抉りを施す。図右面を中心に使用による磨滅痕を認める。317 は、図左面に一部自然面を残す。２片に割れて出土した。背部には敲打による刃潰しを行い、左図左側には抉りを伴う。表裏面に磨滅痕を認め、その位置から、打製石斧として利用されていたものを転用した可能性がある。また右側は、使用中に破損したためか、破断面に再度敲打により抉りを加えようとしているが、途中で放棄している。318 は、打製石斧の刃部付近の小片である。図右面には自然面を残し、左面を中心に使用による磨滅痕を認める。319 は、表裏面に磨滅痕を認める、打製石庖丁を転用した楔形石核である。320 は、方柱状の安山岩の自然礫を利用した砥石で、３面を使用する。

本層の堆積時期については、広口壺 269・271 や甕 291 などより、古墳時代前期前半古段階を下限とする

埋没を想定する。

321 ～ **340** は、出土層位不明の資料である。上述した各層出土資料を補足する資料を中心に図示した。**321** は広口壷の口縁部小片で、端面と端部上面に赤色顔料による塗彩を認める。**340** は、青色片岩製の磨製石庖丁の小片である。節理に沿って縦に半截している。



第 57 図　SX02 平・断面図

SD02（第 54・55 図）

１b 区から 1a 区にかけて、ほぼ直線状に北西方向に配された大型幹線水路で、切り合い関係から既述した SD01 の後継水路と考える。検出面幅 3.0 ～ 3.6 m、残存深約 0.55 mで、断面形は椀底状を呈する。底面標高は、概ね 6.45 m前後で一定し、高低差から流下方向を特定することは困難であったが、先行する SD01 同様に北へ流下していた可能性は高い。埋土は、７層に細分され、最上層～下層の４層に大別して遺物の取り上げを行った。このうち１～５層は、６・７層を削り込むように堆積しており、改修の可能性が考えられる。溝底面に堆積した５・７層を中心に、細砂のラミナ堆積などが認められ、溝機能時の流水下堆積と考えられる。

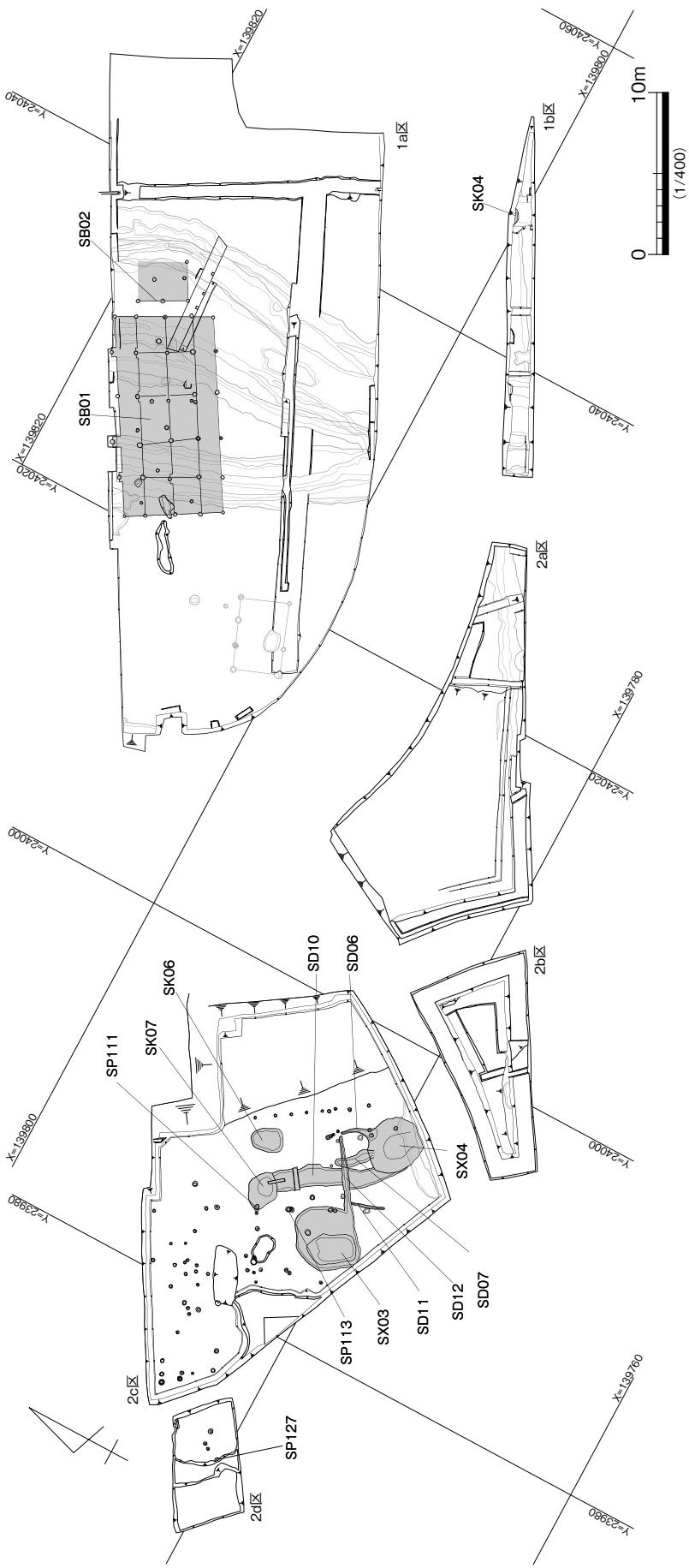
遺物は、コンテナ３箱の弥生土器のほか、図示した以外にサヌカイト楔形石器砕片・剥片計７点（計 87.2 g）や砂岩亜円礫２点が出土した。最上層からの出土資料が半数以上を占め、上層以下からは土器細片が少量出土したに過ぎない。図示した資料もすべて最上層の出土資料である。また、小片化した資料が多数を占める。

出土資料には、広口壷 **341** ～ **343**、甕 **344** ～ **347**、高杯 **350**、鉢 **351** ～ **353** などがある。**354** は弥生土器甕の底部片で、底部中央に復元径 4.1cmの円孔を焼成前に穿孔する。**355**・**356** は凹基式の打製石鏃である。**357** は、砂岩の亜円礫を使用した砥石である。図右面を中心に表裏面に使用痕を認める。また、表裏面や左図右側面に敲打痕を認め、台石や敲き石としても使用された可能性がある。球胴の甕 **345** や鉢 **351** などの出土遺物から、古墳時代前期前半古段階での埋没が想定され、SD01 廃絶後に開削されたものの、比較的短期間で埋没したか、SD01 上層溝と同時並存した可能性が考えられる。

SD03（第 56 図）

1b 区東端で検出した南北溝で、南北両端は調査区外へ延長する。1a 区で北延長部が検出されなかったことから、1a 区までの間で東西どちらかへ大きく屈曲するか、途切れるものと考える。上面から後述する SK04 が掘り込まれていた。検出面幅 1.87 m、残存深約 0.4 m、断面形は底面が概ね平坦な逆台形状を呈する。埋土は２層に細分され、いずれも灰色系粘質土が水平堆積していた。

遺物は、弥生土器小片約 80 点と須恵器皿１点のほか、サヌカイト剥片２点（14.76 g）と砂岩亜円礫１点が出土した。弥生土器は図示した **358** 以外は器種不詳の小片である。また、須恵器は１点のみの出土であり、上位層からの混入の可能性を想定する。**358** は広口壷の口縁部小片である。大きく開く口縁部形態から、弥生時代終末期～古墳時代前期前半期の資料と考えられ、上述した SD01 と同時並存した枝溝の可能性が想定できる。



第58図　中世遺構配置図

SD04（第56図）

1a区北西隅で検出した南北溝である。南北両端及び西肩は調査区外へ延長し、全形は不明である。また南延長部はSG01と重複し、SG01上面で延長部が検出されていないことから、SG01より先行するとみられる。流路方向N19.34°Wに配され、検出面幅0.6ｍ以上、残存深0.14ｍ、断面形は浅い逆台形状を呈する。埋土は２層に細分され、褐灰色シルトと粘質土が水平堆積していた。

遺物は、器種不詳の弥生土器小片５点が出土したのみである。出土遺物から時期を特定することは困難だが、流路方向や埋土の特徴、出土遺物から当該期の遺構の可能性を想定する。

性格不明遺構

SX02（第57図）

1b区西部で検出した浅い落ち込みである。南半部は調査区外へ延長し、全形は不明である。南北0.99ｍ以上、東西1.0ｍを測り、平面形は歪な隅丸長方形状を呈する。残存深は0.1ｍと浅く、断面形は概ね逆台形状を呈する。埋土は、灰白色細砂の単層であった。

遺物は、弥生土器甕の小片１点のほか器種不詳の土

器小片 10 点が出土したのみである。出土遺物は乏しく詳細な時期を特定できないが、概ね弥生時代終末期前後に位置付けられると考える。

中世

当該期には、各調査区において、断続的ながら 11 世紀後半～ 15 世紀前葉の遺構・遺物が出土した。古代末～中世前葉の完新世段丘の形成により、２区低地部が高燥化し、居住域として土地利用がなされるようになった点が画期として指摘できる。

まず、11 世紀後半に 1a 区に大型建物が出現する。12 世紀前半には、２ｃ区を中心に柱穴群がみられるが、建物遺構を復元するまでには至らなかった。以後、15 世紀前葉まで 2c 区を中心に土坑や溝などの遺構がみられ、屋敷地としての利用が断続的に継続する。12 世紀代以降には、１区への遺構の広がりは認められず、概ね２区を東限として屋敷地が営まれたと考えられる。本遺跡に西接する庄八尺遺跡においても、当該期の遺構が検出されており、2c 区でみられた 12 世紀代以降の遺構は、庄八尺遺跡の東限の屋敷地区画として位置付けられよう。

掘立柱建物

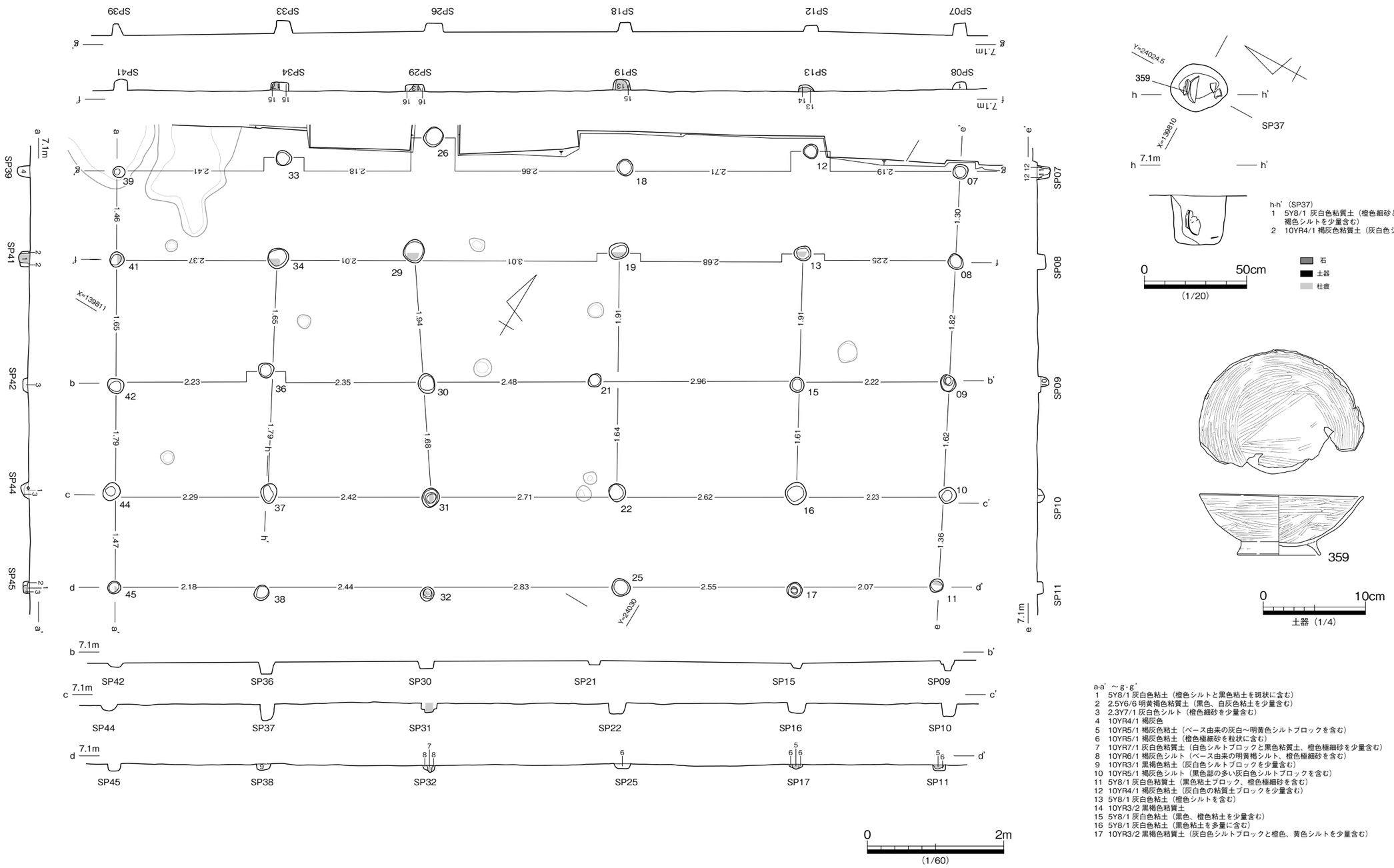
SB01（第 59 図）

1a 区中央北半部で検出した東西棟の掘立柱建物である。桁行北列は調査区北壁際で検出され、さらに１間北に梁間が延伸する可能性も残されるが、梁間南北両端の柱間間隔は 1.30 ～ 1.47 ｍを測り、梁間中央部の柱間間隔 1.62 ～ 1.82 ｍよりも明確に狭いことから、南北二面に庇を有した調査区内で完結する建物として報告する。調査時の復元案とは異なるが、柱間間隔や柱穴の有無を重視して復元案を提示する。四面庇の可能性も検討したが、庇部に対して身舎部分がやや小規模となることから、二面庇とした。身舎部分は梁間２間（3.48 ｍ）、桁行５間（12.29 ｍ）、床面積 42.77㎡（庇部分を含めると 74.49㎡）、主軸方向Ｎ 59.24° Ｅに配された総柱建物として復元する。建物主軸は、遺跡周辺の条里型地割に概ね合致し、建物建築時には遺跡周辺には同地割が施工されていたと考えられる。柱穴は、長径 0.16 ～ 0.30 ｍの略円ないし楕円形を呈し、残存深 0.08 ～ 0.26 ｍの断面逆台形状ないしは２段掘りを呈する。柱穴底面の標高は、6.70 ～ 6.90 ｍと一定せず、柱通りも揃っていない。SP31・SP32 などで、径 0.15 ｍ前後の柱痕を確認した。また、柱穴内での石材の使用は乏しく、SP37 では、口縁部を柱穴中央に向け立位に埋められ、半裁された黒色土器碗１点が出土した。おそらくは柱設置時に供えられた、地鎮に伴う遺物と考えられる。

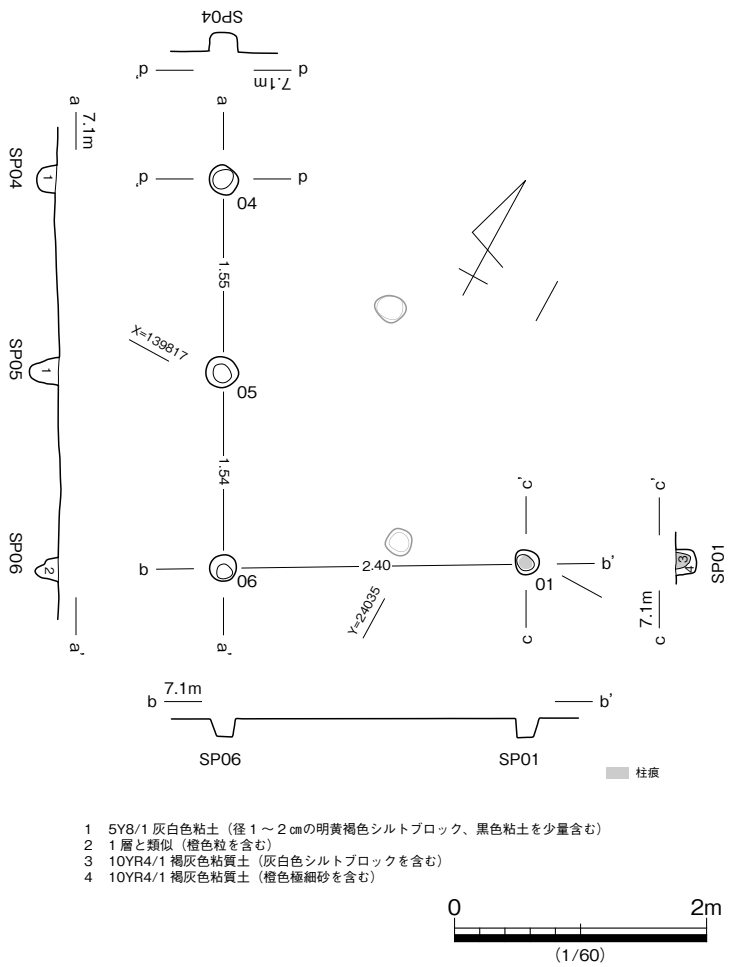
遺物は、上述した黒色土器碗以外には、SP09・10・13・16・29・37・38 の各柱穴から土師質土器などの小片が各１～２点出土したのみである。**359** は、SP37 から出土した黒色土器Ａ類碗である。高台高は高く、深碗形態であり、内外面の調整などから空港跡地編年椀ＡⅡ－２類で、出土遺物から建物の時期は 11 世紀中～後葉に位置付けられる。

SB02（第 60 図）

1a 区北東部で検出した南北棟の掘立柱建物である。梁間北列と桁行東列を欠くが、各柱穴が整った位置関係で検出されたことから、建物遺構として報告する。既述した SB01 の東 0.97 ｍに位置する。梁間１間（2.40 ｍ）、桁行２間（3.09 ｍ）、床面積 7.42㎡、主軸方向Ｎ 28.76° Ｗに配された側柱建物として



第 59 図　SB01 平・断面・出土遺物実測図



第 60 図　SB02 平・断面図

復元する。柱穴は、長径 0.18 ～ 0.25 mの平面略円ないし楕円形を、残存深 0.15 ～ 0.25 mで断面Ｕ字状をそれぞれ呈する。桁方向の柱間間隔は 1.55 m前後で、既述した SB01 よりやや狭い。柱穴底面の標高は、6.74 ～ 6.82 mと概ね一定する。

遺物は、SP04・SP06 の各柱穴から器種不詳の土器小片各１点が出土したのみである。建物の主軸方向は概ね遺跡周辺の条里型地割の方向と合致し、上述したように SB01 と整った位置関係にあることから、SB01 と同時並存の可能性も考えられる。

柱穴（第 61 図）

第 61 図は、建物遺構などを構成しない柱穴から出土した資料で、とくに２区の柱穴出土資料を図示した。**360** は 2d 区 SP127 出土、**361**・**362** は 2c 区 SP111 出土のそれぞれ土師質土器皿ＢⅠ類で、いずれも 12 世紀代に位置付けられる。**363**・**364** は 2c 区 SP113 出土資料である。**363** は土師質土器足釜の小片。口縁部はやや長く、鍔部は一体接合法とみられ低い瘤状を呈する。外面と破断面の一部に煤が付着する。**364** は、土師質土器鍋ＡⅢ類で、口縁端部は瘤状に内上方へ肥厚する。15 世紀後半～ 16 世紀代に位置付けられる。

土坑

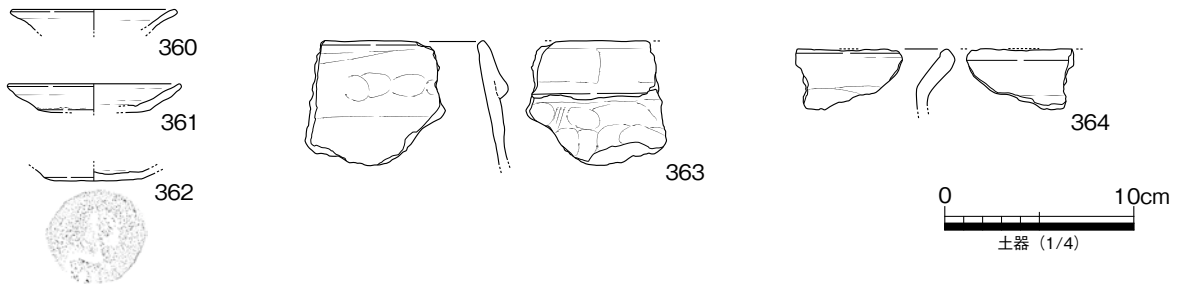
SK04（第 62 図）

1b 区東部で検出した土坑である。既述した SD03 上面から掘り込まれる。調査区北壁際で検出したため、遺構の南端部を検出したにとどまり全形は不明である。検出部分で、東西 1.07 m以上、南北 0.20 m以上を測り、検出部から平面円形ないし楕円形を呈するとみられる。残存深は 0.48 mとやや深い。埋土に関する情報は記録されていない。

遺物は、器種不詳の土器小片１点と備前系焼締陶器小片３点が出土したのみである。出土遺物は乏しく、詳細な時期を特定することは困難だが、当該期を上限とする遺構と判断する。

SK06（第 62 図）

2c 区中央部で検出した土坑である。平面形は、長軸 1.95 m、短軸 1.43 mの南北に長いやや歪な隅丸長方形を、残存深は 0.14 mで、断面形は皿状をそれぞれ呈する。主軸方向はＮ 26.62° Ｗと、概ね条里



第 61 図　柱穴出土遺物実測図

型地割の方向と合致する。埋土は単層で、灰白色シルトのブロック土を多量に含むことから、人為的に埋め戻された可能性が高いと考えられる。

遺物は、土師質土器皿・杯・足釜などの小片若干量と同安窯系とみられる青磁碗小片 1 点、結晶片岩とみられる小礫片 1 点が出土した。**365**・**366** は土師質土器皿ＢⅢ類。**367** は同杯ＤⅡ類。**369** は同足釜の脚部片である。出土遺物から、13 世紀後半代に位置付けられる。

SK07（第 63 図）

2c 区中央部で検出した土坑である。SD10 と重複し、切り合い関係から後出する。平面形は、長軸 1.98 m、短軸 1.83 mのやや東西に長い歪な隅丸方形状を、残存深 0.17 mで、断面形は皿状をそれぞれ呈する。埋土中には暗灰色粘土のブロックが多量に含まれることから、人為的に埋め戻された可能性が高いと考えられる。

遺物は、図示した以外に土師質土器皿・杯・擂鉢・足釜ＢⅢ類・鍋などの小片が若干量出土したほか、サヌカイトチップ 1 点が出土した。**370**・**372** は土師質土器皿ＢⅢ類。**371**・**373** は同杯である。**374** は同鍋ＡⅡ類の口縁部小片で、外面に煤が付着する。出土遺物から、14 世紀後半代を中心とした時期に位置付けられる。

溝

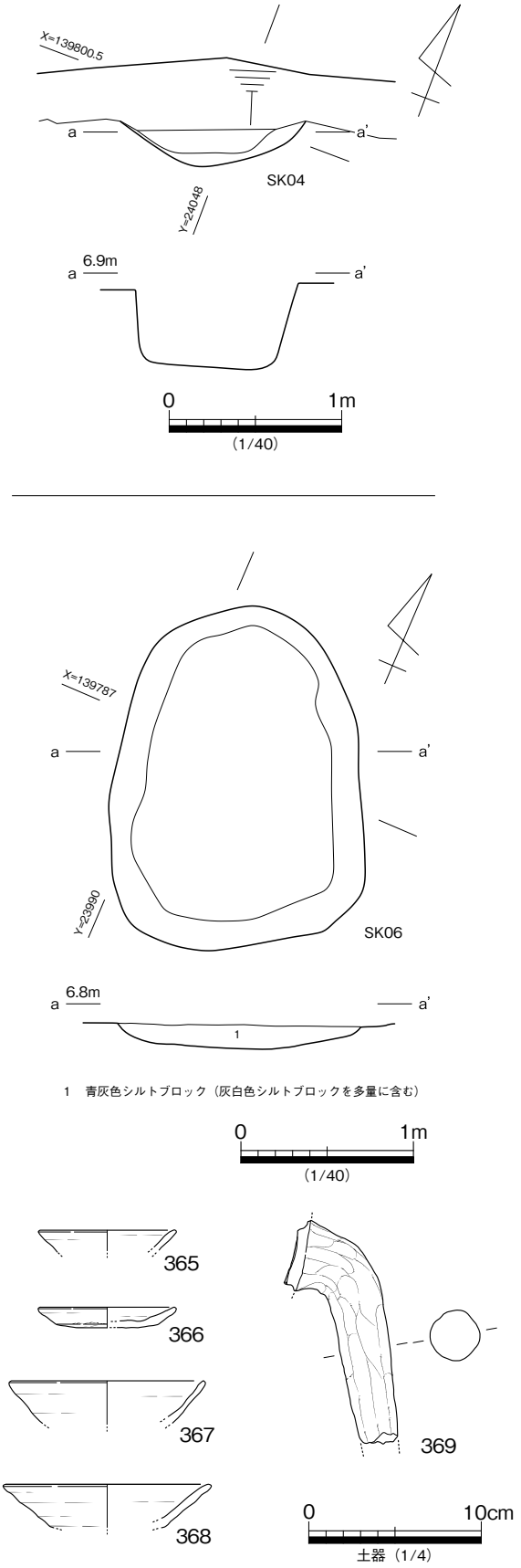
SD07（第 64 図）

2c 区中央部で検出した南北溝である。SD12、SX04 と重複し、両者より先行する。延長約 2.4 mを検出し、北端は調査区内で途切れる。検出面幅 0.57 m前後、残存深 0.08 mを測り、断面形は皿状を呈し、流路方向は概ねＮ 41.21° Ｗに配される。埋土は黄灰色粘土ブロックの単層であった。

遺物は出土しておらず、時期を特定することは困難だが、SD12、SX04 より先行すること、周辺遺構との位置関係から、当該時期の遺構として報告する。

SD10（第 64 図）

2c 区中央部で検出した南北溝である。南北両端はそれぞれ SK07・SX04 に切られ、SK07 より北で延長を確認できなかったことから、調査区内で途切れるものと考えられ、後述する明瞭な流水堆積に乏しい埋土の点からも、区画溝などの機能が想定される。検出面幅 1.3 m前後、残存深 0.12 mをそれぞれ測り、断面形は皿状を呈する。流路方向はＮ 34.76° Ｗに配され、周辺の条里型地割の方向と概ね合致する。埋土は３層に細分され、中層（２層）には、多量の炭化物粒が含まれ、溝周辺で燃焼行為を伴った作業や



第 62 図　SK04・SK06 平・断面・出土遺物実測図

火災などが生じた可能性が想定される。また、上層（１層）はブロック土を多量に含む粘土で埋没し、人為的に埋め戻された可能性が想定される。

遺物は、図示した以外に器種不詳の弥生土器や土師質土器皿・足釜・鍋、瓦質土器、青磁碗の小片 20 点程度が出土した。**375** は土師質土器皿ＢⅢ類。**376** は土師質土器足釜ＢⅣ類。**377** は同鍋ＡⅡ類。口縁部外面は薄く煤が付着する。**378** は凹基式の打製石鏃で、混入資料である。出土遺物から、14 世紀後半代を中心とした時期に位置付けられる。

SD11（第 64 図）

2c 区南西部で検出した小溝である。北端は SD12 に切られ、延長約 2.1 ｍを検出したにとどまる。検出面幅 0.15 ｍ前後、残存深 0.05 ｍで、流路方向はＮ 18.82° Ｗに配される。埋土に関する記録はない。

遺物は出土しておらず、時期を特定することは困難だが、SD12 より先行すること、周辺遺構との位置関係などから、当該時期の遺構として報告する。

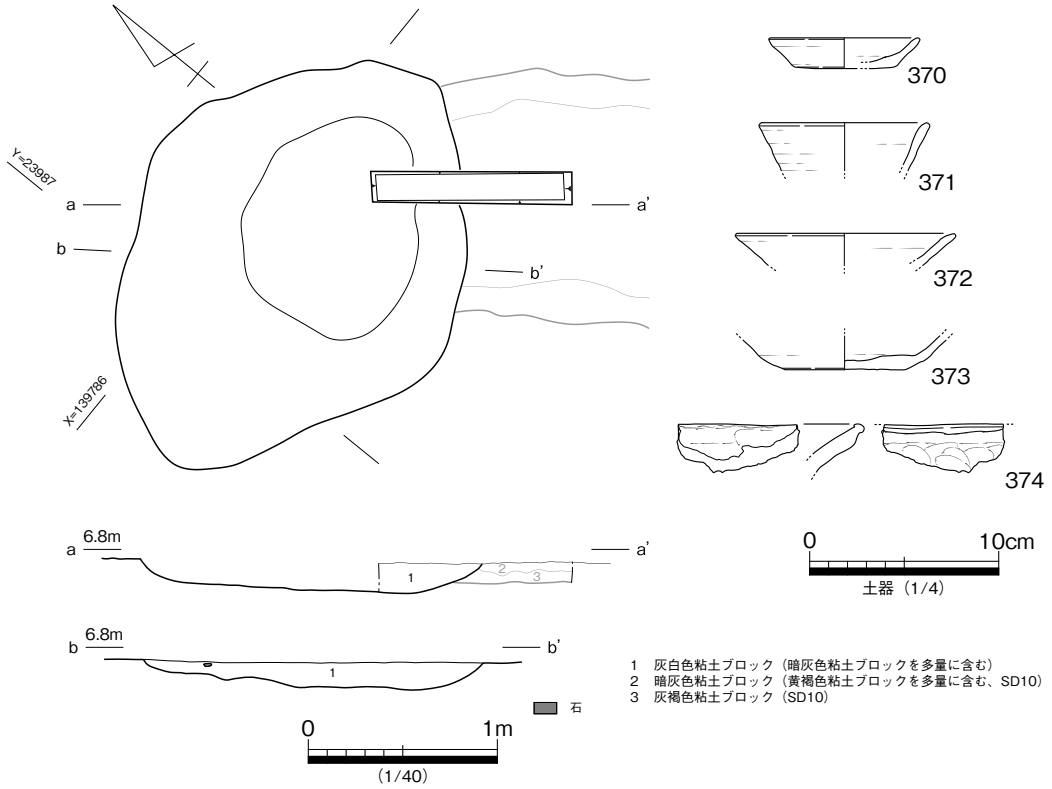
性格不明遺構

SX03・SD12（第 65 図）

SX03 は 2c 区中央部で検出した。南東隅から直線溝 SD12 が東へ延びる。SX03 は、東西約 3.9 ｍ、南北約 3.6 ｍの平面やや歪な隅丸方形状を呈する。断面形は２段掘りとなり、西半部が 0.16 ｍ深く掘り込まれ、底面には顕著な起伏が認められた。残存深は最大 0.3 ｍを測る。

SD12 は、SX03 の南東隅から約 4.6 ｍ東へ延び途切れる。検出面幅 0.38 ｍ、残存深 0.06 ｍ、流路方向Ｎ 55.89° Ｅに配され、断面形は皿状を呈する。底面の標高は、東端部で 6.69 ｍ、SX03 との合流部で 6.65 ｍをそれぞれ測り、高低差から SX03 へ流下していたと考えられる。

SX03 の埋土は３層に細分され、下層（３層）は２段掘りの深く掘り込まれた部分にのみ堆積が認められ、多量のブロック土を含むことから人為的



第 63 図　SK07 平・断面・出土遺物実測図

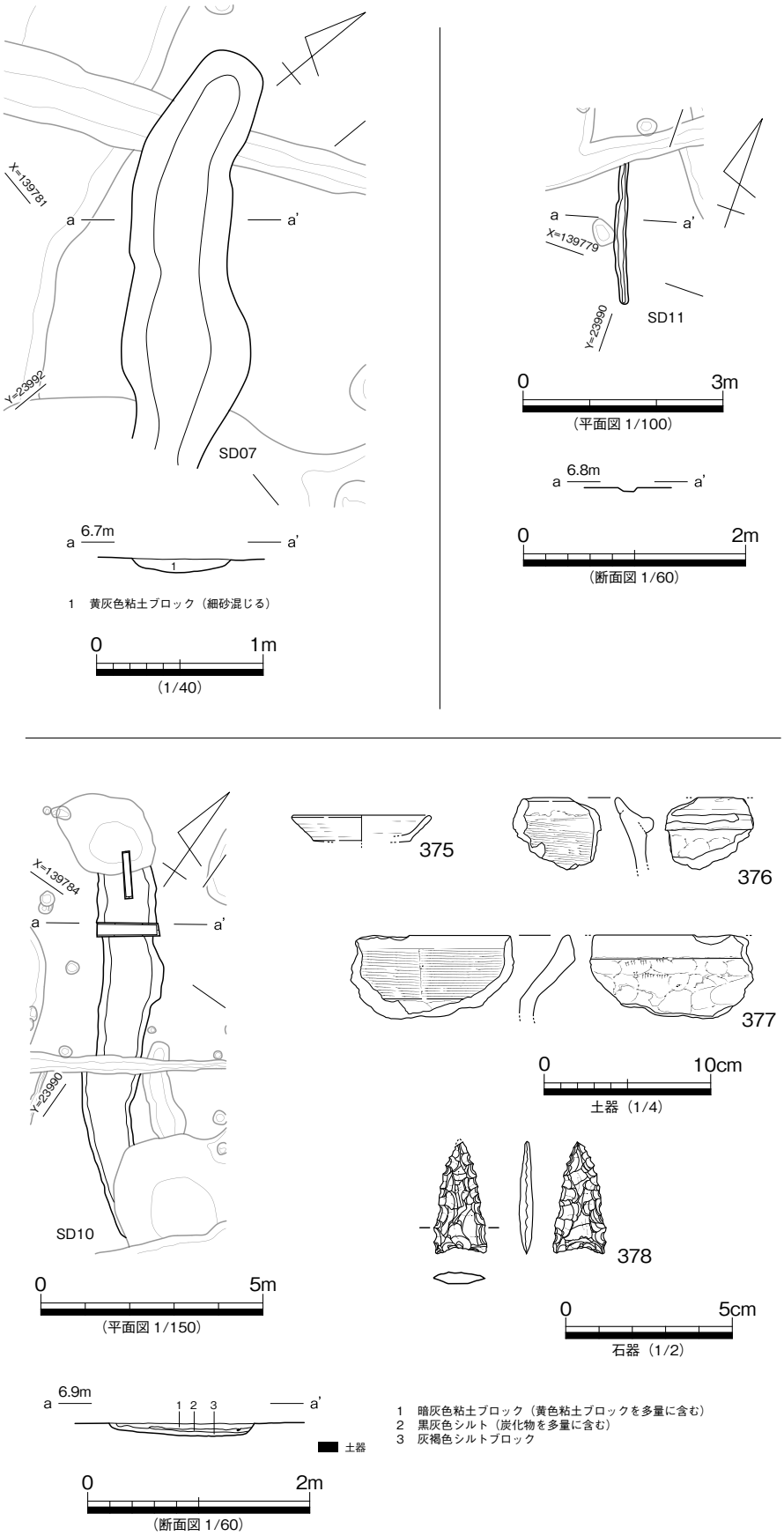
に埋め戻された可能性が高いと考えられる。上位層との埋土の差や人為的に埋め戻されていることから、SX03 に先行する別の遺構の可能性も考えられる。中層（２層）は、灰色粗砂で水成堆積の可能性があり、本遺構の性格として水溜などの用途が考えられる。上層（１層）は、SD12 と一連の堆積層で、本層も人為的な埋め戻しの可能性が想定される。

遺物は、SX03 から土師質土器皿・杯・足釜などの小片が 20 点程度、SD12 から土師質土器皿・足釜などの小片 10 点程度とサヌカイト剥片 1 点がそれぞれ出土した。図示した遺物は、すべて SX03 の出土遺物で、**382** が下層、**379**・**380** が中層、**381** が上層から出土した。**379**・**380** は土師質土器皿。**382** は同足釜ＢⅢ類である。体部外面に僅かに煤が付着する。**381** は同足釜ＢⅣ類で、鍔部は一体接合法である。本資料も、体部外面には煤が付着する。出土資料から、14 世紀後半代に開削・機能し、14 世紀末～ 15 世紀前葉には埋没した可能性が考えられる。

SX04・SD06（第 66 図）

SX04 は 2c 区南端部で検出した。北東隅から溝 SD06 が北へ延びる。SP71・SP72、SD07 ～ SD10 と重複し、SP71・SP72、SD08・SD09 より先行し、SD07・SD10 より後出する。SX04 は、東西約 3.2 m、南北約 3.3 mの平面やや歪な隅丸方形状を呈する。残存深は 0.3 mを測り、断面形は皿状を呈する。SD06 は、延長約 1.9 mを検出した。検出面幅 0.3 m、残存深 0.05 mと浅く、断面形は皿状を呈する。底面の標高は、北端部で 6.68 m、SX04 との合流部で 6.60 mをそれぞれ測り、高低差から SX04 へ流下していたと考えられる。

埋土は４層に細分され、上層（３～５層）と下層（６層）に大別する。下層は、グライ化した暗灰色粘土で、滞水下の堆積層と考える。上層は、いずれもブロック土を多量に含み、人為的に埋め戻された



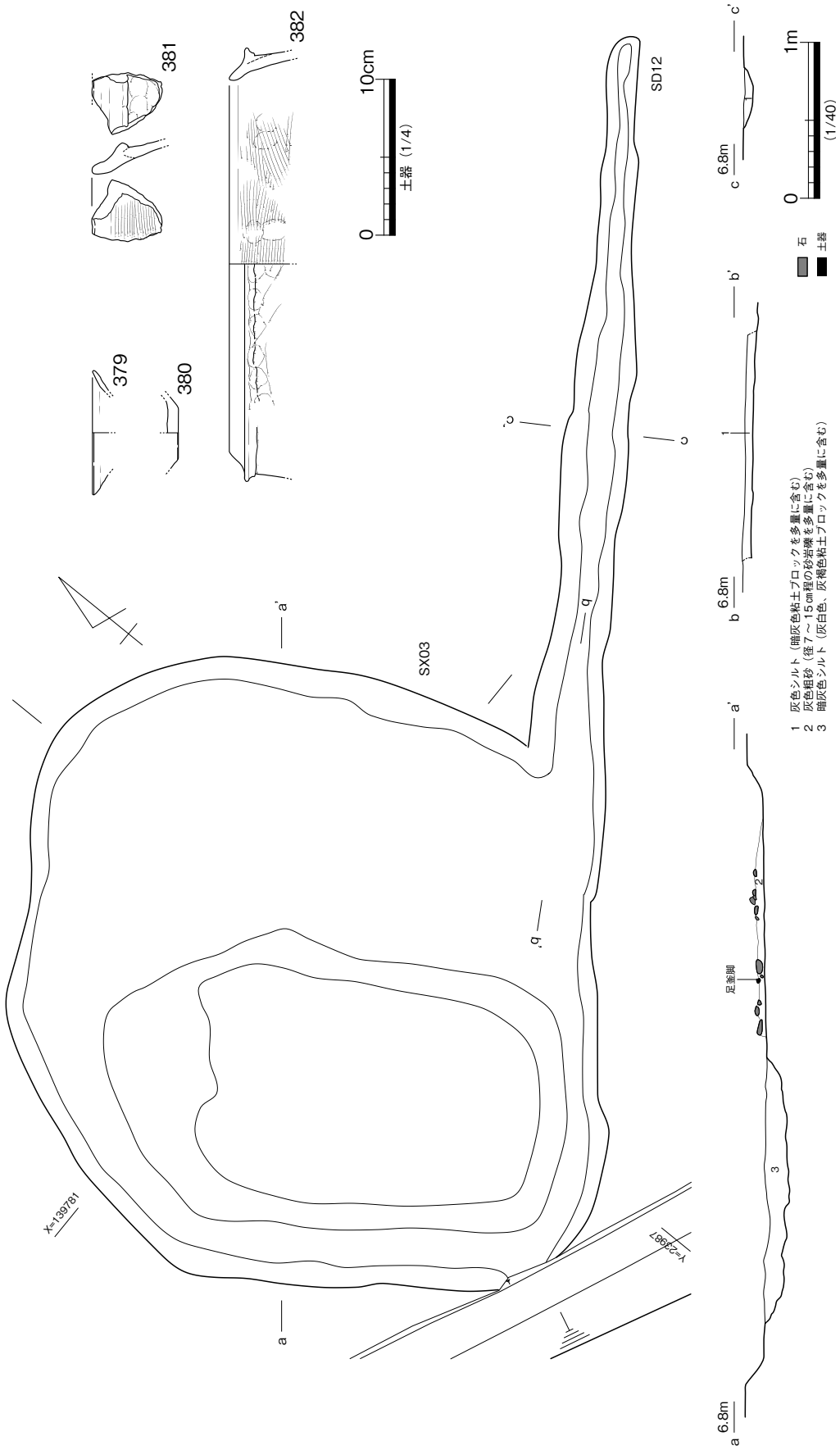
第 64 図　SD07・SD10・SD11 平・断面・出土遺物実測図

可能性が高いと考えられる。

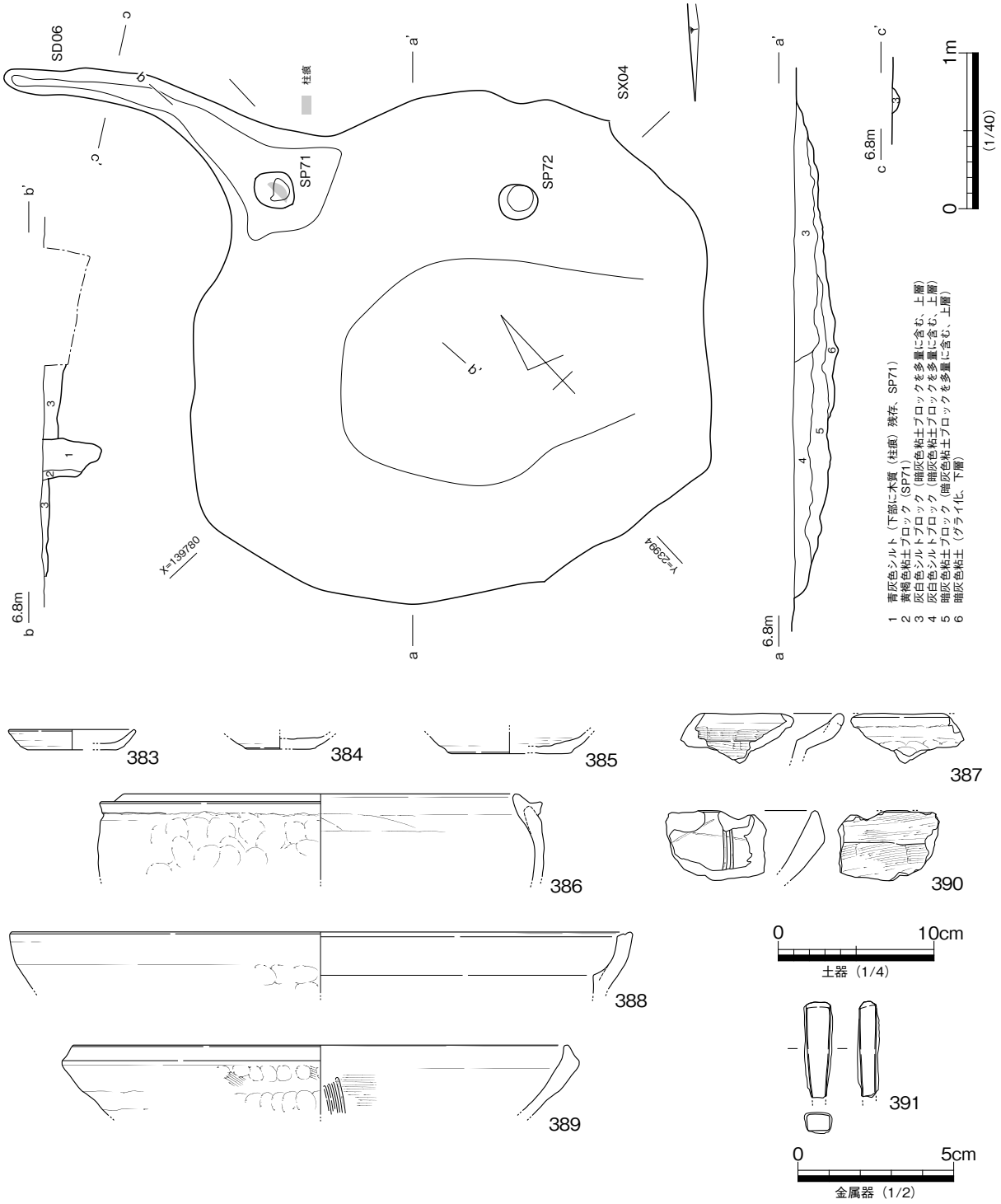
遺物は、図示した以外に土師質土器皿・擂鉢・鍋・足釜、備前焼などの小片が若干量出土したほか、サヌカイト剥片１点が出土した。やや上層からの遺物が多い。９点を図示した。**384**・**386**・**387**・**389**～**391** が上層、その他が下層出土の遺物である。

383・**384** は土師質土器皿。**385** は同杯である。**386** は同足釜ＢⅣ類。鍔部は一体接合法により成形され、体部外面に煤が付着する。**387** は同鍋ＡⅠ類。外面には煤が付着する。**388** は瓦質土器鍋ＢⅡ類。**389** は土師質土器擂鉢ＡⅡ類。体部内面には、横ハケの後４条の卸目（原体幅 0.9㎝）を施す。**390** は瓦質土器擂鉢ＡⅢ類。内面には２条の卸目が施される。**391** は、断面形が幅 0.9㎝、厚さ 0.5㎝の板状を呈することから、釘ではなく楔の可能性を考える。下端部を折損する。

出土遺物から、14 世紀末～ 15 世紀前葉の遺構と考えられる。



第 65 図　SX03・SD12 平・断面・出土遺物実測図



第 66 図　SX04・SD06 平・断面・出土遺物実測図

近世

当該期の遺構は、各調査区において土坑や溝が散在し、明確な居住遺構は確認されていない。また、各調査区で確認された旧耕作土からは、当該期の遺物が出土しており、調査区周辺は水田などの耕作地として土地利用がなされていたと考えられる。また、２区東半部では低地部を利用して、当該期に開削されたと考えられる小規模な溜池 SG01 が検出された。周辺耕地の補助的な水源として利用されたと考えられる。

土坑

SK05（第 68 図）

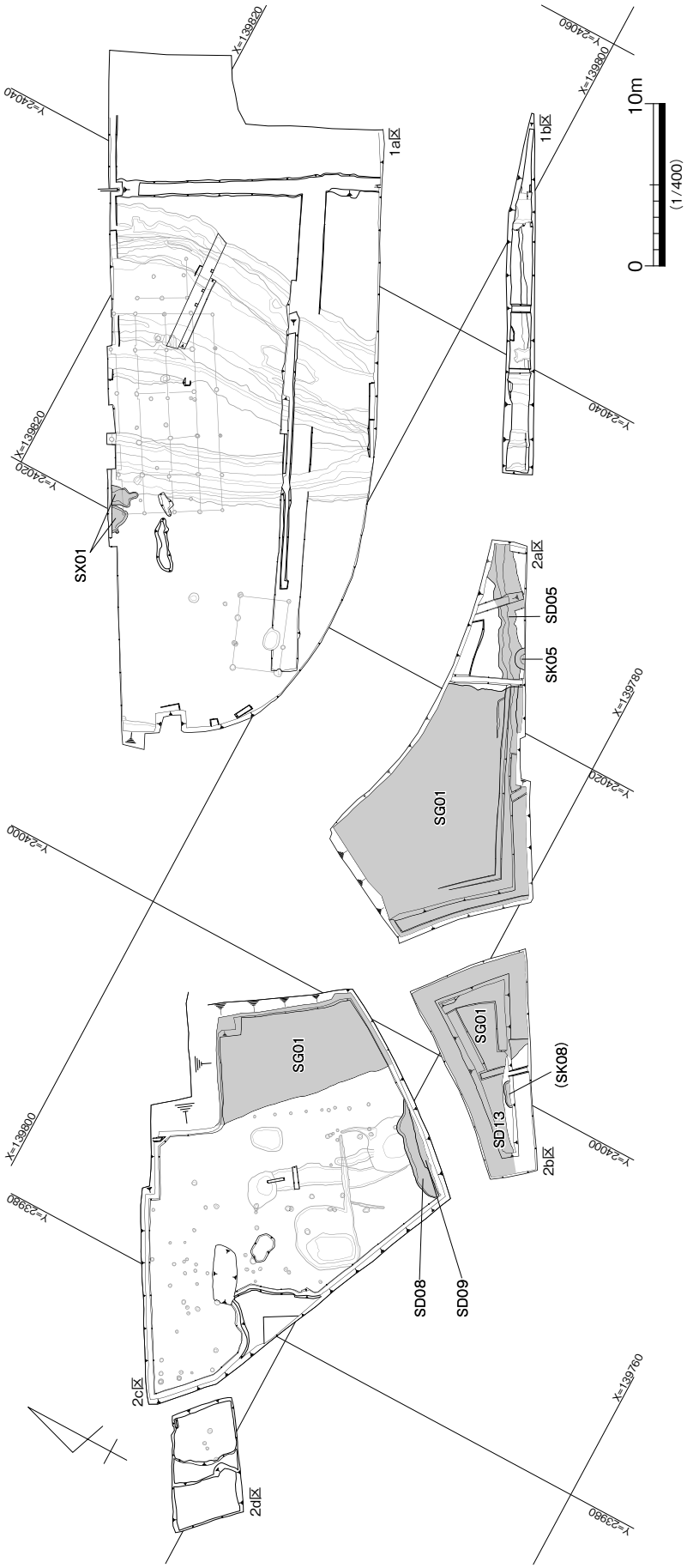
2a 区南東部で検出した土坑である。南半部は調査区外へ延長し、全形は不明。また SD05 と重複し、切り合い関係から後出する。東西 1.3 m 以上、南北 0.5 m 以上を測り、検出部から平面形は楕円形ないし隅丸方形状を呈するとみられる。残存深 0.65 m とやや深い。埋土に関する記録はない。

遺物は、器種不詳の土器や土師質土器小片各 1 点、焼締陶器、施釉陶器、肥前系染付磁器碗などの小片数点と、サヌカイト剥片 1 点が出土したのみである。**392** は施釉陶器皿である。図化可能な資料は乏しいが、出土遺物や SD05 より後出することから、18 世紀代以降の遺構の可能性を想定する。

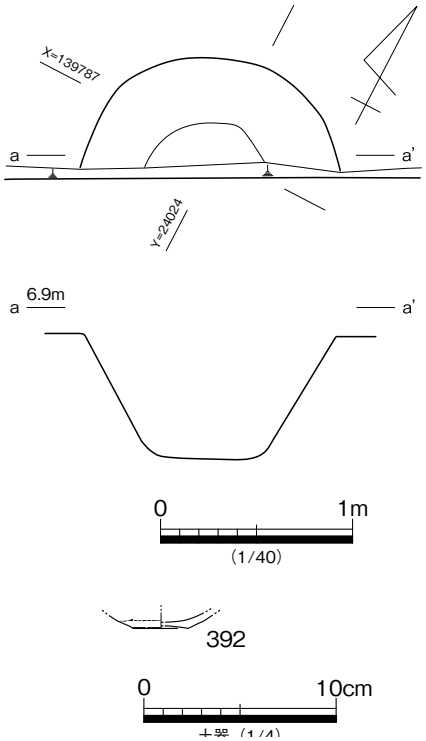
溝

SD05（第 69 図）

2a 区南端部で検出した東西直線溝で、北岸及び東西両端は調査区外へ延長し、全形は不明である。SK05、SG01 と重複し、いずれよりも先行する。検出面幅 3.3 m 以上、残存深 0.45 m を測り、断面形は概ね逆台形状を呈する。流路方向は概ね N 58.4° E に配され、



第 67 図　近世遺構配置図



第 68 図　SK05 平・断面・出土遺物実測図

遺跡周辺の条里型地割の方向に合致し、多度郡の条里二条 13 里 18 坪と 19 坪の坪界溝（註１）に位置する。底面の標高は、東端で 6.26 m前後を、西端で 6.13 m前後をそれぞれ測り、高低差から西へ流下し、遺跡西端部を北流する現存の用水路（条界溝）へ連接していたと考えられる。埋土は３層に細分され、上下２層に大別する。下層（３層）は、中～粗砂をラミナ状に含む灰色粘土で、溝機能時の堆積層と考えられる。上層（１・２層）は下位層に多量のブロック土の混入がみられ、人為的に埋め戻された可能性が高い。おそらくは後述する溜池 SG01 築池に伴い、廃絶したものと考えられる。

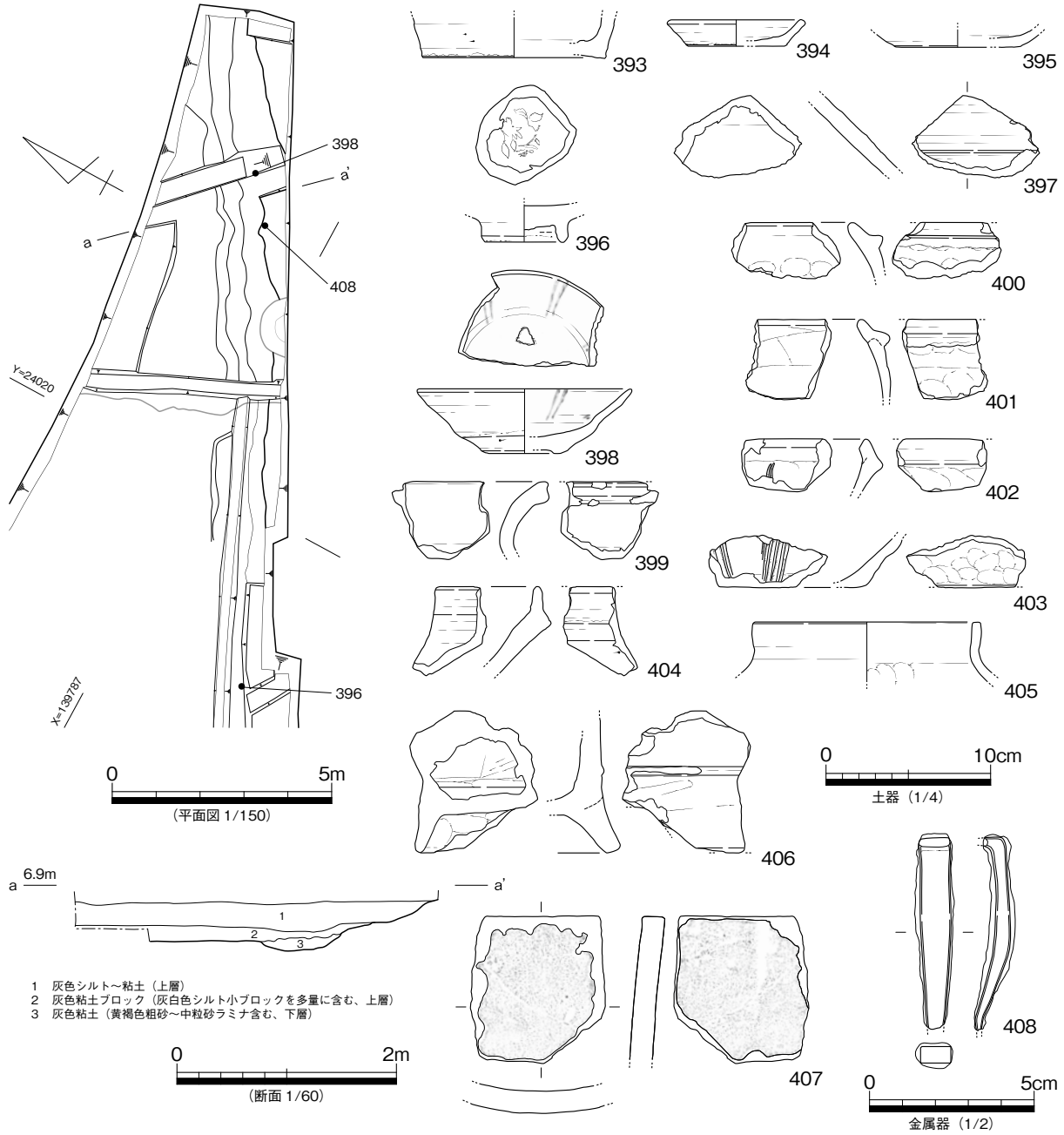
遺物は、図示した以外に、弥生土器甕・高杯、須恵器、土師質土器皿・杯・擂鉢・足釜・鍋・釜、瓦質土器火鉢・壺、備前焼擂鉢・甕、白磁壺、平瓦などの小片がコンテナ１箱程度のほか、サヌカイト剥片８点、安山岩塊石１点が出土した。出土資料の大半は、弥生土器や中世土師質土器類が占め、やや上層からの出土が多い。図示した中では、**393**・**397**・**399**・**400** が上層、**394**・**404**・**406**・**407** が下層出土の遺物である。

393 は須恵器壺の底部片である。**394** は土師質土器皿ＢⅢ類。**395** は同杯。**396** は青磁碗Ｅ類。見込みに印花文を認めるが、文様は判然としない。畳付を越えて、高台内面途中まで釉がかかる。**397** は白磁壺の肩部小片で、外面に沈線１条を刻む。黄味がかった釉を内外面施釉する。**398** は肥前系陶器皿。見込みに胎土目１箇所を認める。**399** は瓦質土器甕の口縁部小片。**400** は土師質土器足釜ＢⅢ類。鍔部は屈折法とみられる。**401** は足釜ＢⅣ類で、鍔部は一体接合法とみられる。**402**・**403** は同擂鉢。**403** の卸目の条数は５条で、原体幅 1.5㎝を測る。**404** は備前焼擂鉢。乗岡編年中世５期。**405** は土師質土器釜。**406** は瓦質土器火鉢である。体部外面に１条の低凸帯が巡り、底部に台形状の３脚が付すとみられる。**407** は平瓦片。**408** は、断面形が幅 0.9㎝、厚さ 0.5㎝の板状を呈することから、楔の可能性を考える。上下端部を折損する。出土資料には、中世 15 世紀代以前に位置付けられる資料が出土しているが、いずれも小片であり混入の可能性が高い。**398**・**402**・**405** などの遺物から、開削時期については断定できないが、16 世紀後葉～ 17 世紀前葉の埋没の可能性を想定する。

SD08（第 70 図）

2c 区南端部で検出した東西溝である。南岸及び東西両端は調査区外に延長し、全形は不明である。北に緩やかに湾曲して流下していたとみられる。SX04、SD09 と重複し、SD09 より先行し、SX04 より後出する。後述する SD09 は、本溝とほぼ同位置に開削され、残存深も近似することから、本溝の後継溝である可能性が高い。検出面幅 1.4 m以上、残存深 0.15 mで、断面形は皿状を呈するとみられる。埋土は灰褐色シルトの単層であった。

遺物は、土師質土器釜や擂鉢、器種不詳の備前焼小片などが 15 点程度出土したのみである。**409** は土師質土器足釜ＢⅢ類。鍔部は屈折法によるとみられる。中世に遡り、混入資料と考える。**410** は土師質土器擂鉢である。出土遺物から、17 世紀前葉を下限に埋没した可能性が想定される。

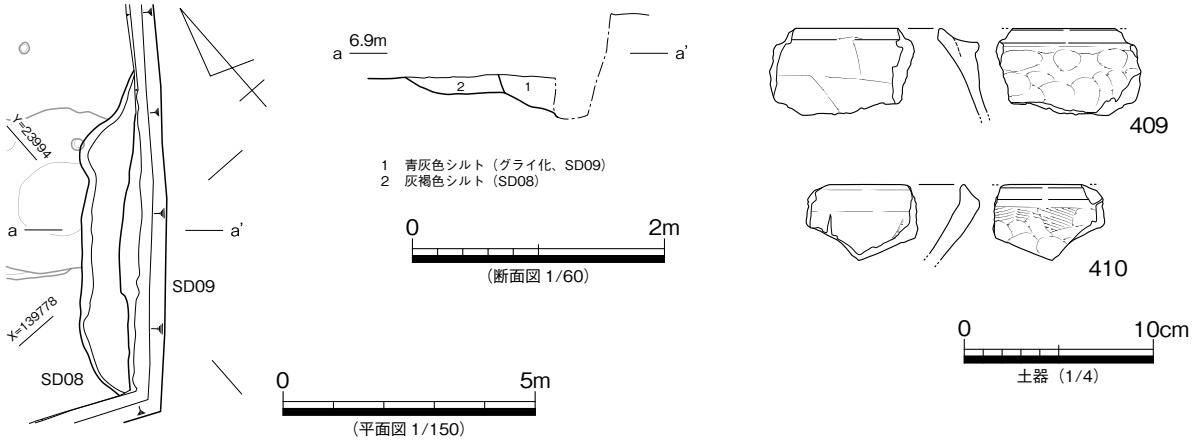


第 69 図　SD05 平・断面・出土遺物実測図

SD09（第 70 図）

2c 区南端部で検出した東西溝で、僅かに北岸の一部が検出されたにとどまる。既述したように、SD08、SX04 より後出し、SD08 の後継溝であり、埋土はやや相違するが、後述する SD13 と同一溝である可能性も考えられる。検出面幅 0.6 m以上、残存深 0.28 m以上で、断面形はU字状を呈するとみられる。埋土は、グライ化した青灰色シルトの単層である。

遺物は、土師質土器把手付鍋や瓦質土器羽釜などの小片 4 点が出土したのみである。出土遺物から、18 世紀代の埋没の可能性が想定されるが、既述したように SD08 との関係から、その開削は 17 世紀代に遡る可能性が想定される。



第 70 図　SD08・SD09 平・断面・出土遺物実測図

性格不明遺構

SX01（第 71 図）

1a 区中央北端部で検出した浅い落ち込みである。調査区北壁際で検出し、北半部は調査区外へ延長するため、全形は不明である。平面的には隣接する２基の遺構として調査したが、調査区北壁の土層の観察により一連の遺構と判断した。SB01、SD01 と重複し、切り合い関係からいずれよりも後出する。東西約 3.4 m、南北 1.83 m以上の平面不定形で、残存深 0.08 ～ 0.18 mで、断面形は概ね皿状を呈するが底面には顕著な起伏が認められた。埋土は褐灰色粘質土の単層で、ブロック土が多量に含まれることから、人為的な埋め戻しの可能性も考えられる。

遺物は、肥前系磁器碗と器種不詳の土器のそれぞれ小片１点が出土したのみである。出土遺物から詳細な時期を特定することは困難だが、18 世紀後半以降の遺構と考える。

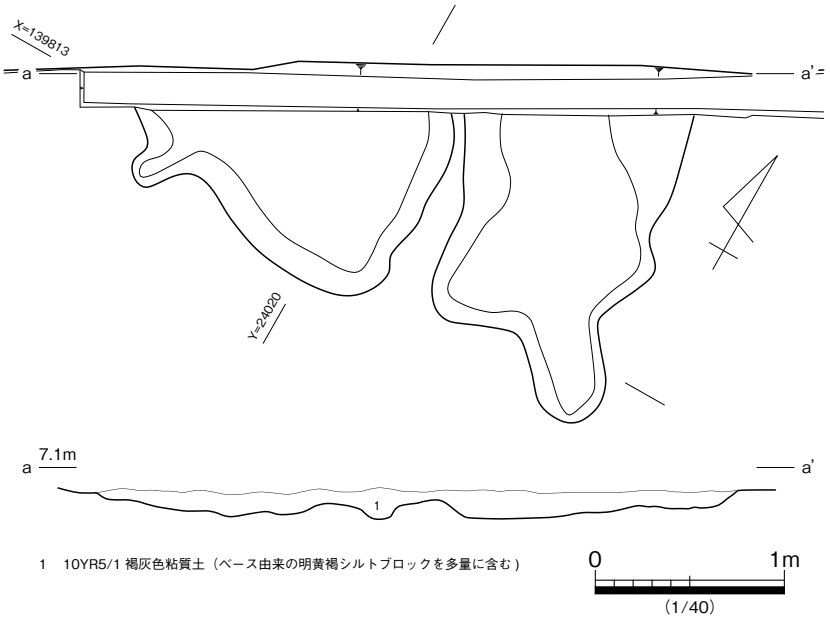
溜池

SG01・SD13（第 72・73 図）

２区東半部で検出した、溜池もしくは出水と考えられる遺構である。2b 区で西に東西溝 SD13 が付設する。SD13 は、掘り方南辺を検出したのみで北辺は調査区外となり、上述したように SD09 が、本溝と一連の遺構となる可能性もあるが断定はできない。検出面幅 0.8 m以上、残存深 0.7 m以上で、流路方向N 53.44° E に配される。調査区の西縁には北流する水路が現在開削されており、その水路の開削時期は不詳だが、SD13 はその位置関係から、現水路から溜池へ用水を給水するために開削された可能性が想定される。

SG01 は、東西 23.5 m、南北 22.5 m以上で、東西両辺は直線状を呈して平面形は概ね長方形状を呈するとみられる。掘り方西辺の方位N 42.62° W、東辺はN 25.9° Wを測り、概ね周辺地割に合致して築池されていた可能性が高い。池南西部の 2b 区では、多量のブロック土を含む灰色系粘土（第９図 2b 区南壁８～ 16 層）を、水平に約 0.5 m盛土した堤体を検出した。2a 区と 2c 区では堤体は確認されなかった。2b 区堤体上面の標高は 6.8 m前後を測り、2a 区と 2c 区の遺構面の標高はそれぞれ 6.7 mであることから、両区の堤体は池廃絶後の耕地化により削奪された可能性が高いと考えられる。また、2b 区において池内を標高 5.8 mレベルまで掘り下げたが、池底を確認することはできなかった。多量の湧水により、それ以下の掘り下げは断念した。池内埋土は８層以上に細分され、多量のブロック土を含む池廃絶に伴

う埋め戻し土である上層（第９図 2b 区北壁２～５層・南壁３層）と、池機能時の自然堆積層と考えられる下層（同図２ｂ区北壁６～９層・南壁４～７層）に大別する。なお SD13 は、2b 区北壁の土層の観察から SG01 と一連の埋土が堆積しており、同時期に並存・埋め戻されたと考えられる。



第 71 図　SX01 平・断面図

遺物は、図示した以外に、土師質土器皿、同足釜、瓦質土器鉢･羽釜、備前焼灯明皿、同甕、焼締陶器擂鉢、肥前系施釉陶器皿・刷毛目瓶、瀬戸・美濃系陶胎染付碗、肥前系白磁碗・青磁染付碗、龍泉窯系青磁碗、平・丸瓦の小片が若干量とサヌカイト剥片１点、動物遺体が出土した。

411 は備前焼皿。内外面に塗土を施す。**412** は龍泉窯系青磁Ⅱ -b 類碗。**413** は中国製白磁Ⅱ -1b 類皿。いずれも 13 世紀代以前の資料であり、混入の可能性が高い。**414** は肥前系陶胎染付碗。**415** は同染付磁器碗。**416** は同京焼風陶器平碗。内面見込みに、崩れた錆絵の楼閣山水が描かれる。**417** は同陶器灰釉皿。見込みに２箇所の胎土目跡を認める。**418** は、いわゆる「くらわんか手」の同染付磁器皿。**419** は同陶器瓶の体部片。外面には褐釉が施され、内面には同心円タタキを認める。**420** は施釉陶器土瓶。白泥塗布後に灰釉を施し、肩部に双耳を付す。２次的な被熱のためか、釉は変色する。**421** は、備前焼の小形の壺の底部片。**422** は須恵器壺の底部片。内外面の一部に自然釉が掛かる。**423** は備前焼擂鉢で、乗岡編年中世５～６期の資料と考えられる。**424** は、三巴文軒丸瓦の瓦頭部の破片である。瓦当面にキラコを使用する。**425** は、下向三葉文を中心飾りとし、左右に２転する唐草を配する軒平瓦である。瓦当面にキラコを使用する。**426** は、半裁花菱文を中心飾りとし、左右に２転する唐草とその間に子葉を配する。本資料も、瓦当面にキラコを使用する。**427** は、丸瓦の玉縁部の破片で、凸面に「多度津三木屋□□」の刻印を認める。

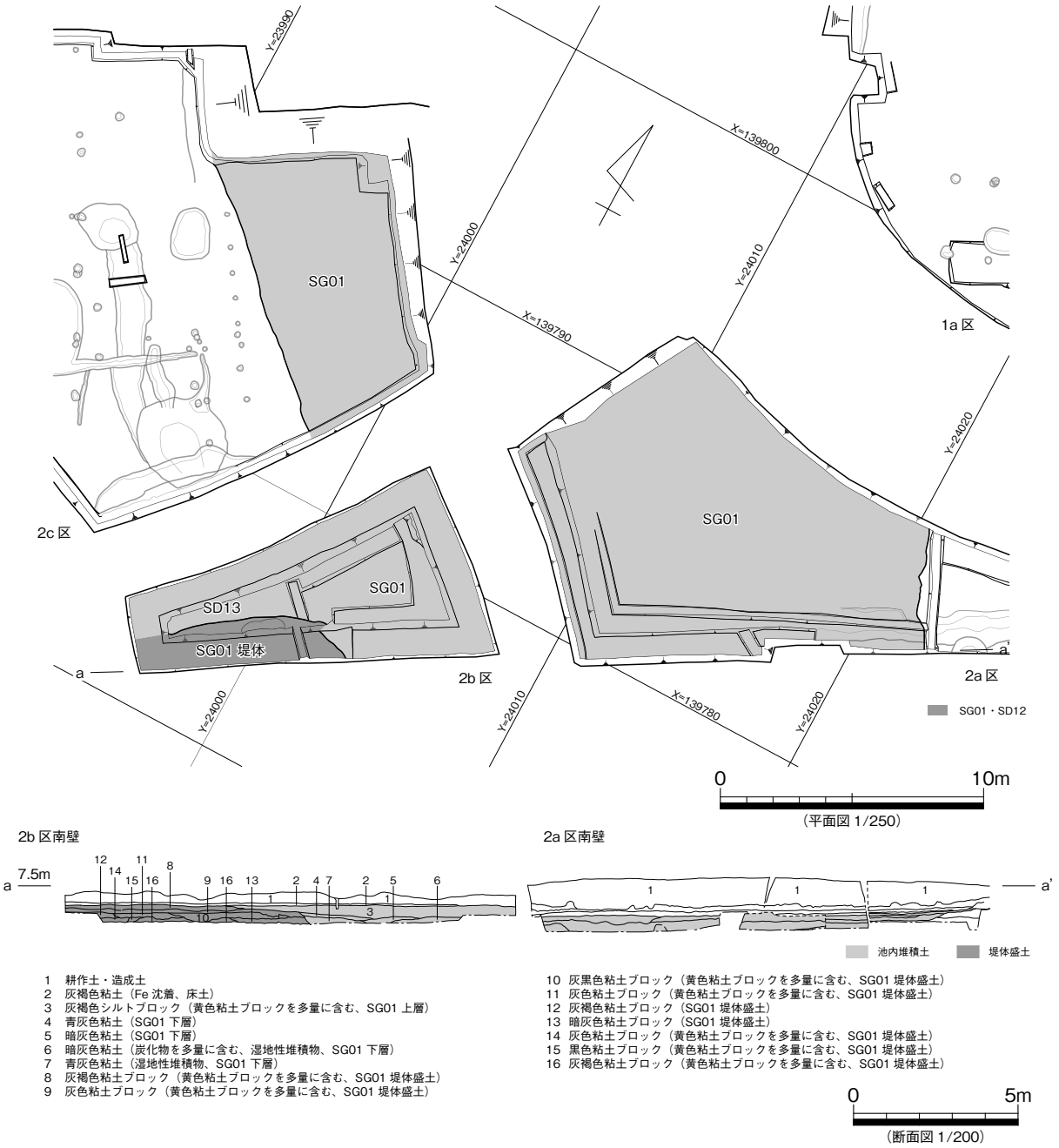
428 は下層出土のイスノキの横櫛である。図右半部を欠損する。正面略長方形を呈し、肩部が角張ることからＡＩ類（奈良国立文化財研究所 1985）に分類される。３cmあたりの歯数は 17 枚、歯の復元最大長は 2.5cmである。

池底まで掘り下げていないため、詳細な築池時期については不明だが、上述した SD05 の廃絶が本池築池に関連するものであれば、17 世紀前葉を上限とすることは確実である。また、出土遺物から 18 世紀後半～ 19 世紀初頭には埋め戻された可能性が高いと考えられる。

時期不明の遺構

SK03（第 74 図）

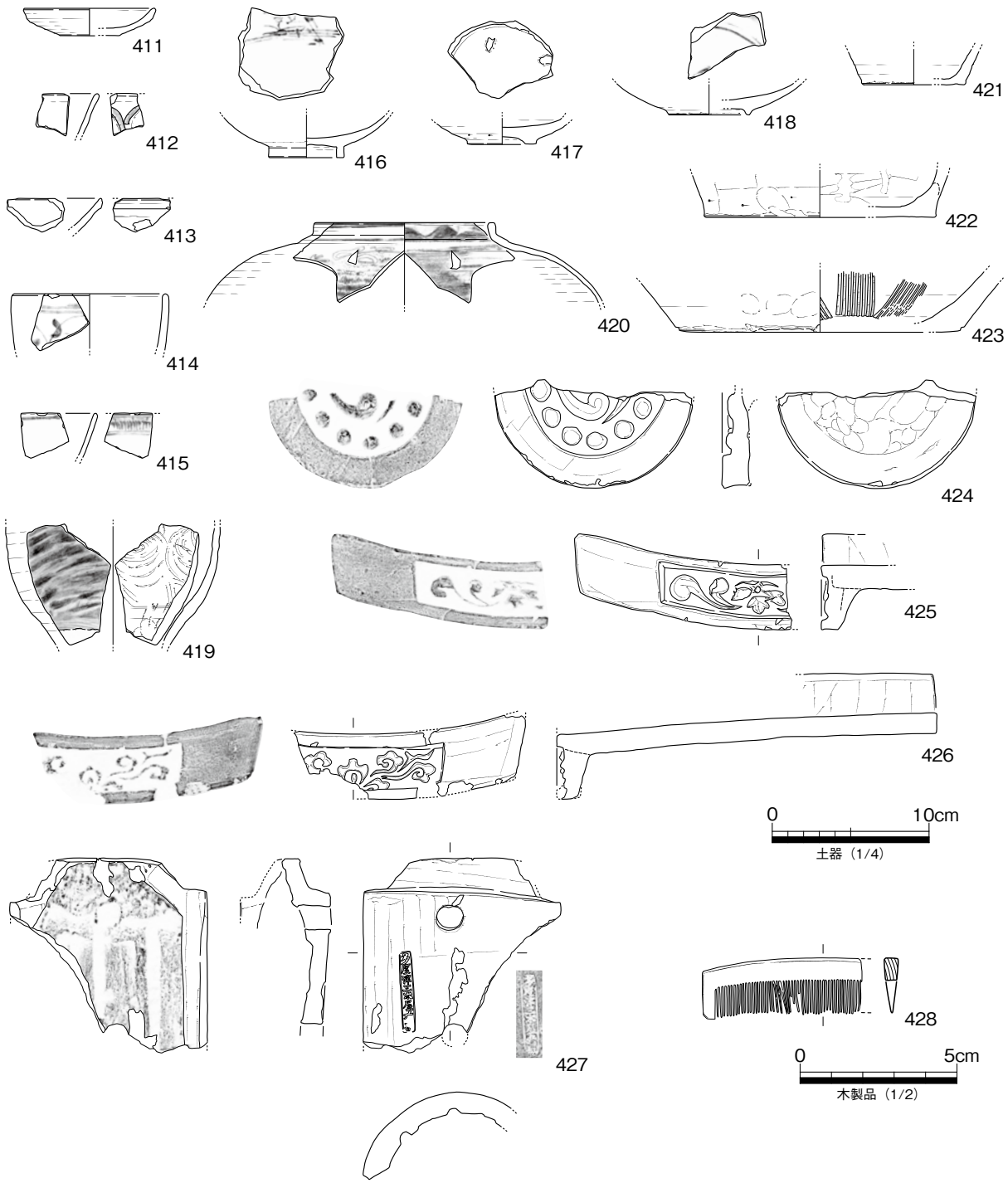
1a 区中央北部で検出した土坑である。弥生時代後期～古墳時代前期前葉を上限とする１区第１遺構



第 72 図　SG01 平・断面図

面のベースとなる明黄褐色シルト（第 6 図 26 層）下面から掘り込まれる。平面形は、長軸約 0.55 m、短軸約 0.40 mのやや南北に長い隅丸方形状を、残存深は 0.09 mで、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は、暗灰色粘土ブロックの単層であった。

遺物は出土していない。また、検出面から弥生時代後期より遡る時期の遺構であることは確実だが、上面に堆積した明黄褐色シルト層から遺物は出土しておらず、さらに本遺構以外に当該遺構面で他の遺構は確認されていないため、時期を含めた本遺構の位置付けについて、弥生時代後期を下限とする遺構であること以上に、現状では評価が困難である。調査区周辺の調査の進展を待って評価することとしたい。

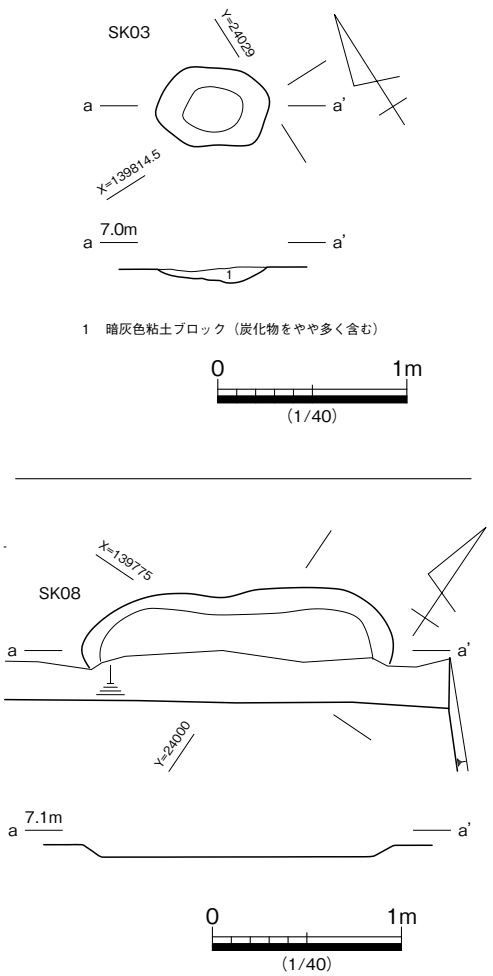


第 73 図　SG01 出土遺物実測図

SK08（第 74 図）

2b 区南西部、溜池 SG01 の堤体盛土上面で検出した土坑で、遺構南半部は調査区外へ延長し、全形は不明である。東西 1.6 m以上、南北 0.4 m以上を測り、検出部から平面形はやや歪な隅丸方形状を呈するとみられる。残存深は 0.06 mであった。埋土に関する情報は記録していない。

遺物は出土しておらず、詳細な時期を特定することはできないが、SG01 堤体上面で検出したことから、近世以降の遺構と考える。



第 74 図　SK03・SK08 平・断面図

遺構外出土の遺物（第 75 図）

第 75 図の遺物は、遺構検出時や包含層などから出土した資料で、本遺跡を評価する上で必要と認めるものを図示した。**429** は 1b 区旧表土出土の中国製白磁皿Ｖ類。11 世紀後半～ 12 世紀前半の資料とされ、１区中世建物の時期と概ね合致する。**431** は、2c 区遺構面精査時に出土した打製石鏃である。**439・440** は 1a 区遺構検出中、**432** ～ **438・441** は 1b 区旧表土からそれぞれ出土した灰緑～青緑色チャートの火打石で、色調や質感からいずれも徳島県大田井産とみられる（蔵本 2019）。そのうち明瞭な使用痕（敲打痕）が認められないか乏しい **433・434・437・439** は、稜角再生時に生じた剥片の可能性が高い。**442** は 1a 区調査中に出土した安山岩製の砥石。方柱状の石材を利用して、比較的平滑な３面を使用する。**443** は 2a 区の機械掘削時に出土した角礫凝灰岩製の五輪塔水輪である。最大径 29㎝前後に復元される。縦に３分割され、そのうち厚さ 12 ～ 13㎝のもの２点が出土した。破断面はほぼ平滑な平坦面をなしており、意図的に分割されたとみられるが、分割した目的や用途は不明である。石材は、安山岩とみられる角礫を含み、善通寺市天霧山周辺の石材が使用されている。時期は 15 ～ 16 世紀代と考えられる [註２]。**444** は、2a 区出土の明治６年（1873）発行の半銭銅貨である。全体に錆化が顕著で、文字や文様の不鮮明な部分が多い。

補註

１　条里プランの復元は、金田 1988 に依る。

２　大川広域行政組合埋蔵文化財係　松田朝由氏のご教示による。

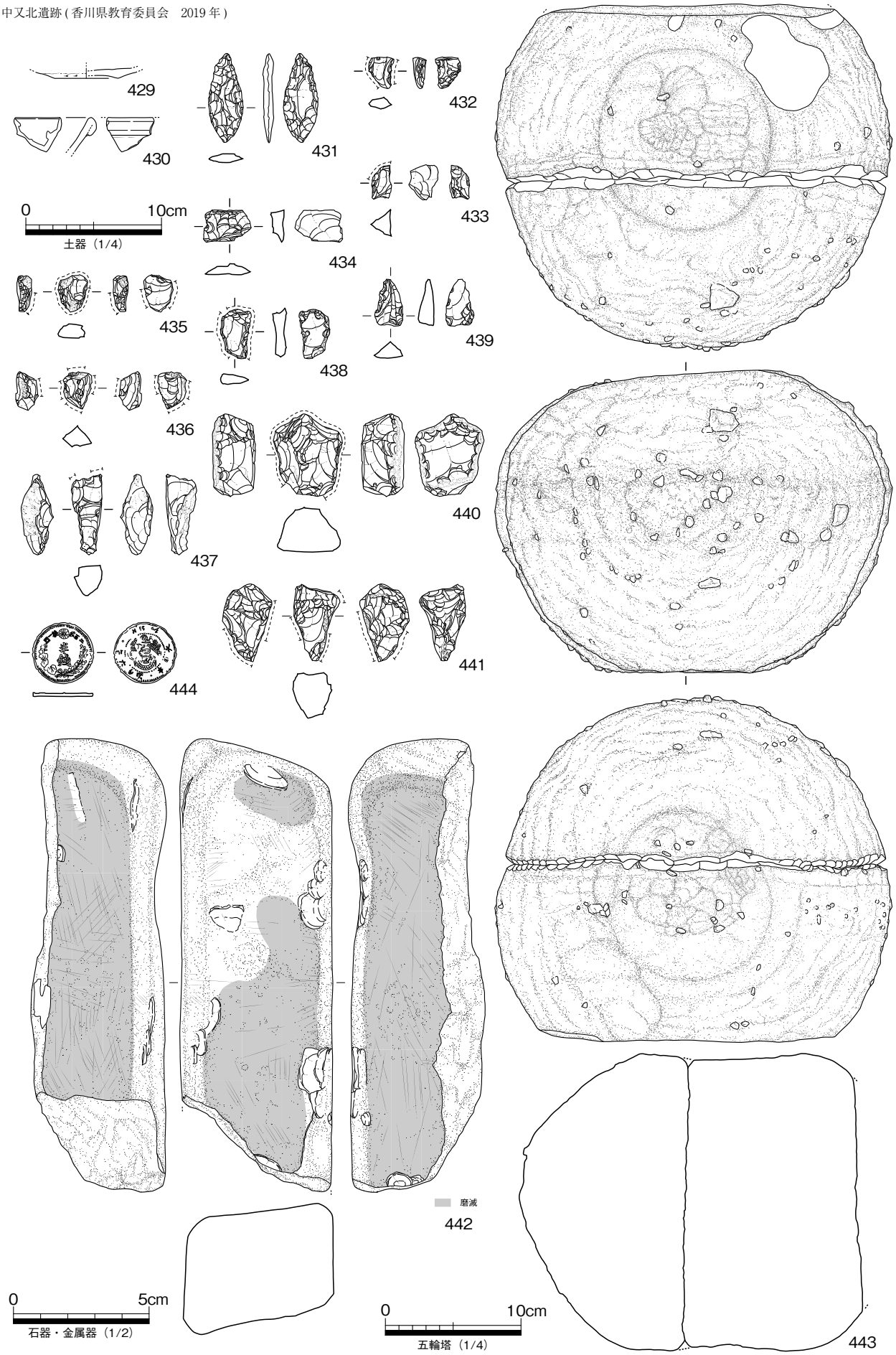
文献

金田章裕 1988「讃岐の条里遺構」『香川県史』第１巻通史編、香川県

蔵本晋司 2017「香川県内出土の石棒について」『国道 11 号大内白鳥バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第３冊　田中遺跡』、香川県教育委員会・国土交通省四国地方整備局

蔵本晋司 2019「香川県周辺地域における火花式発火法の導入と展開」『県道中徳三谷高松線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第１冊　上林遺跡』

上記引用文献のうち、発掘調査報告書等については巻末に一括して掲載した。



第 75 図　遺構外出土遺物実測図